

大町遺跡

西日本鉄道株式会社太宰府駅駅舎改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992年3月

古都大宰府を守る会

大町遺跡

西日本鉄道株式会社太宰府駅駅舎改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992年3月

太宰府市教育委員会

屋根は「権現流造り」 西鉄太宰府駅改築終わる



西鉄太宰府太宰府駅の駅舎を、天童宮の女園が「金龍宮工事」が「五五目」了し、太宰府天童宮の社屋を思わせる「権現流造り」の屋根が出来上がった。写真

新駅舎は鉄骨半蔵建てで、駅舎や太宰府が運営する観光案内所の面積約一千平方メートル、ラッシュ時の乗降客のため、コンコース旧駅の一・五倍に

目果まで増築する。開駅から大天川四百五十メートルのキックが二枚のコンクリート

備事業を八年から延期。参道のカラー舗装を施え、開駅も着色化したり出す。

(1991年1月26日 西日本新聞より)

序

太宰府市は周知のとおり、一大地方都市福岡の一角を占め、近年の好景気に伴い都市化の傾向をますます顕著なものへと致しております。

一方、開発にともなう埋蔵文化財の審査件数も年毎に増加し、発掘調査に至る物件も相変わらず多く、太宰府の古代、中世を中心とした時代の情報をつぎつぎに提供いたしております。

この度報告いたします大町遺跡は、現代の太宰府の玄関口とも申せませ西日本鉄道太宰府駅の駅舎の改築工事に伴い太宰府市教育委員会が平成二年度に発掘調査を実施したもので、安楽寺太宰府天満宮の参道街の変遷を知るうえで欠くことのできない内容を持っております。本書が今後の太宰府の都市としての在り方を考える上で活用されることを願っております。

調査、報告に際して西日本鉄道株式会社の担当方々には有形無形のご協力、ご配慮をいただきました。また、調査報告に従事していただいた作業員の方々には並々ならぬご尽力をいただき、ここに記して感謝申し上げます。

平成4年3月31日
太宰府市教育委員会
教育長 長野治巳

例 言

1. 本書は西日本鉄道株式会社の委託を受けて太宰府市教育委員会が発掘調査を実施した太宰府市大字太宰府所在の大町遺跡の調査報告書である。

2. 本書に使用した図のうち遺構の実測図はアジア航測株式会社が空中写真測量によって図化した1/20の実測図を、遺物の実測図は太宰府市教育委員会が1/1のスケールで作成したものをベースとして使用している。

3. 中世土器の年代観は山本信夫を設定した期の設定に基づく。(「太宰府における古代末から中世の土器、陶磁器」山本信夫1988年 中世土器の研究Ⅳ 日本中世土器研究会ほか)

4. 本書で使用される中世土器の調整手法、特にナデについては、残された単位幅、断面形状などよりaとbに分けて記述している。即ち、単位幅が2から4ミリほどで断面形状が稜線が連続する波状を呈し、土器に含まれる砂粒がナデの方向に従って真線的に尾を引きながら移動しているものが「ナデa」である。ケズりに近いものもあり、工具を用いたナデと考えている。

それに対し、「ナデb」は単位幅が体部では1センチを越えナデの方向に細かい線状痕が走り、砂粒は表面に引き起こされるものより埋没するものが多い。広義のヨコナデがこれに相当する。指によるナデと考えられる。また、同じbでも口縁端部の再調整によってハッキリと残されたものをb'としている。(詳細後述)

また、本書で使用した中世土器特に土師器の図は、異なる調整間の境を実線で、同じ調整同士の境を破線で図示しており、視覚上の稜線は省かれている。

5. 本書の執筆は遺物の一部を中島恒次郎、森田レイ子、田中克子がその他を山村信榮が、編集は山村、田中、森田が協議の上おこなった。

6. 本遺跡に関する図面、写真、遺物等の保管、管理は太宰府市教育委員会が一括しておこなっている。

目 次

1. はじめに	3
歴史的環境	
太宰府支線小史	
2. 調査環境	7
調査経過	
調査体制	
調査方法	
整理方法	
3. 遺跡の調査	11
層序	
遺構と遺物	
土坑 (SD)	
井戸 (SE)	
溝 (SD)	
その他の遺構と遺物 (SX ほか)	
土器法量表	
遺構一覧表	
出土遺物台帳	
4. 小 結	44
5. 参考資料	
筑前野間焼について	48
「太宰府天満宮錯幕表鑄立日記」	75



第1圖 太宰府市北東部遺跡分布圖



第2図 参道地下基盤土層



第3図 大町周辺遺跡調査図

1. はじめに

歴史的環境

今回調査の大町遺跡は太宰府市の北東部、太宰府天満宮の西側に展開する門前町にあり、現在は太宰府への旅客口である西日本鉄道株式会社の太宰府駅が建っている。

本報告の大町遺跡周辺での考古学的な調査は近年の参道周辺の再開発の活発化に伴っておこなわれるようになった。馬場遺跡（1、2次）、新町遺跡（1から4次）、連歌屋遺跡、安楽寺太宰府天満宮（1から3次）などがそれで、試掘、立会調査によってさらにデータを集積している。1989年から1990年にかけて太宰府市によって現在参道とよばれる西鉄太宰府駅から天満宮にかけての道路地下に上下水道、ガス、電機ケーブルなどを同時に通す共同溝を埋設する工事をおこなった。この際に一時撤去される2本の鳥居の解体工事と共同溝埋設に伴う掘削に立会調査をおこない、鳥居については寛永通宝や銅のクサビなど鳥居建築時に使用された遺物を回収し、地下地盤については地下約3メートル、長さ約300メートルの土層データを収集した。

遺跡周辺の地形や土壌は調査の所見によれば中生代に出現した花崗岩が風化し崩壊する堆積輪回に支配され、大町遺跡の乗る基盤層は現在の地表面下約4mに俗に「真砂土」と称される風化花崗岩とその上面に乗る第三紀に堆積したとされる厚さ約2mほどの人頭大の花崗岩礫が主体の礫層である。この礫層上で人類の活動は大町遺跡の隣地で調査した新町遺跡3次調査で縄文時代晩期中頃の包含層を最古のものとし、同時期の遺物が今回の調査でも出土している。その後、平安時代までは顕著な遺物や遺構は検出されていない。平安時代に入り特に10世紀になるとにわかには該期の遺物が増加し、11世紀後半から12世紀前半にかけて馬場遺跡二次調査、連歌屋遺跡に見られるような溝を用いた土地の区割り＝街区の発生が見られ、それに伴って在地産の土器を主体とする大量消費をおこなう生活空間が出現する。これら遺跡群に隣接する安楽寺（現太宰府天満宮）内でも同時期に寺域の拡張、建物建設のための地業などが盛んにおこなわれたことが発掘調査によって確認されている。また、大宰府での条坊の整備もこの時期であり、安楽寺の前面までがこの時期の条坊に含まれる可能性がある。いずれにしても安楽寺の経済活動と大町遺跡を含む周辺遺跡の動向は密接な関係にあり、近世的な門前町が成立する以前の空間構造の解明が望まれる。

近世の町並みの形成史は現状では考古学側からの資料では十分な説明はできない。安楽寺天満宮本殿を含む中世の大町遺跡周辺は、中世末期の天正六年に当時大城山にあった岩屋城を攻めた秋月氏の兵火によって灰燼に帰したとされている。近世の町並みの復興は地元に残る「平井文書」などより在地の商、職人を中心に天満宮社家に、新たに大城山で被災した原山無量寺

の僧侶が加わり、これらの人々が中心となって行なわれたらしい。これによって成立した村落が「宰府村」である。「筑前国続風土記付録」、「筑前名所図絵」など近世の地誌掲載の挿絵などの絵画資料を見るかぎり、江戸中頃以降、明治から現代に至るまで街路などのレイアウトは変わっていないようである。江戸期の宰府村は社家、商職人、農家、旅宿の異なる四つの街区から構成され、藩より宿駅の指定を受け、現在の五条交差点から天満宮に至るまでの間短い直線道路と辻からなる通りに「ウナギの寝床」と呼ばれる短冊型の地割を持つ家々がひしめくように建ち並んでいた。江戸後半期の旅行ブーム、遊参的な「宰府参り」の流行で街が活況を呈したことは各種の旅行記に記されているところである。(最近の調査で発見される江戸期の遺構の大半がこの時期のものであることを付記しておく。)

現代の天満宮を中心とした街の存在もこの時期に規定されたもので、明治以降の交通手段や産業構造の変化など街をとりまく外界と時代の要求に伴って表面的な景観が変化して来たに過ぎない。

太宰府支線小史

現在、太宰府天満宮への主たる旅客はバスを利用する団体の遠距離旅行者と乗用車や鉄道を利用する個別的な近距離旅行者の二者がある。バスや乗用車の利用は近年になって急に増えたもので、それまでは鉄道が主体であった。鉄道は現在、西日本鉄道株式会社の太宰府支線が本線の大牟田線と連絡し、県下から多くの旅客を短時間で太宰府まで輸送している。



第4図 太宰府馬鉄(二日市中央通)



第5図 昭和27年の西鉄太宰府駅

表1 西鉄太宰府線1991年ダイヤグラム



太宰府支線は明治35年に行なわれた天満宮の千年大祭に合わせて、太宰府馬車鉄道株式会社が資本金5万円をもって、現在のJR二日市駅前から迎田（現西鉄二日市駅付近）、五条を通る2.75km、軌間914mm、客車（16人乗り）、貨車2両で同年5月1日より営業を始めている。明治40年7月17日商号を太宰府軌道と改称し、大正2年1月20日には動力を馬から蒸気機関に切り替え、客車も32人乗りとなった。営業は機関車4両、客車8両でおこない、それまであった貨物は廃止された。現在の大牟田線本線は大正13年によく九州鉄道が福岡-久留米間を開通させている。昭和2年9月24日、太宰府線は資本金を50万円に増資し蒸気機関を電車に換え、軌間を1435mmにし、線路も現在の位置に変更した。昭和4年9月5日蒸気機関で改軌せぬまま営業を続けていた現JR二日市駅-迎田間0.8kmは廃止され、その後、昭和9年6月30日太宰府軌道は九州鉄道と合併、その九州鉄道も昭和17年9月22日、九州電気軌道などと共に現在の西日本鉄道株式会社となった。

太宰府駅の駅舎は昭和2年に整備されたものと思われ、天満宮の1050年の大祭に合わせて昭和25年10月より改良工事をおこない、駅舎を従来より50m後退させてロータリーを設けてホームも4両編成の車両が発着できるように延長し、同27年1月8日に竣工した。その駅舎も今回平成4年の天満宮の忌祭1090年、本殿改築400年の大祭に合わせて鉄骨樹脂鋼板葺きに建て替わり、平成3年10月25日に竣工した。

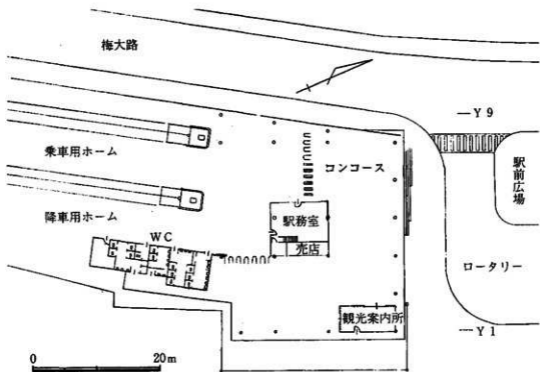
(参考文献)

「明日に翔ける」1988年 西鉄社史編纂委員会

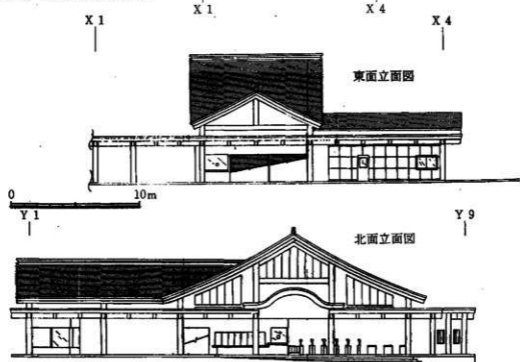
「西日本鉄道七十年史」S53=1978年 西日本鉄道株式会社

「西日本鉄道」1989年9月（『鉄道ビクトリアル』No517）鉄道図書刊行会

「西日本鉄道」1985年（『私鉄の車輛』9）保育社



第6図 西鉄太宰府駅平面図



第7図 西鉄太宰府駅南・北側立面図

2. 調査環境

調査経過

太宰府市大字太宰府字大町2281-1（現宰府二丁目5-1）における埋蔵文化財に係わる事前協議は1989年10月13日に西日本鉄道株式会社不動産事業局ビル事業部建築課より太宰府市教育委員会社会教育課文化財係（当時）に西鉄大牟田線太宰府支線太宰府駅の駅舎の改築に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて照会があり、それを受けて太宰府市が同年11月と翌年の5月に試掘調査をおこなった。この結果同敷地内での遺構の存在と調査の必要性を認め、これに基づき両者間で委託契約を結び、1991年6月5日から6月22日の期間で本調査をおこなった。

調査体制

調査組織は以下のとおりである。

太宰府市教育委員会

総括	教育長 長野治己	発掘調査	渡辺ひとみ 山下澤子 吉田正子 渡辺律子
庶務	教育部長 西山義則		花園美千子 関陽子 藤原重登 齊藤政利
	社会教育課長 関岡勉（当時）		桧垣みどり 古賀理恵子
	文化課長 佐藤恭宏	整理作業	原野正子 吉田勝子 久保喜代香 田中典子
	文化財係長 鬼木富士雄（当時）		横山美津子 森田レイ子（整理、報告担当）
	埋蔵文化財係長 富田謙		境一美 井上信正
主事	岡部大治	科学保存処理	山中幸子
	白水伸司（当時）	写真撮影	空中写真企画（代表壇陸夫）フォトハウスおか
	川谷豊		（代表 岡紀久夫）、狭川、山村
調査 技師	山本信夫（事前協議、試掘担当）	狭川真一	
	城戸康利（事前協議、試掘担当）	中島恒次郎	
	山村信榮（調査、報告担当）	緒方俊輔	
	田中克子（整理、報告担当）	塩地潤一	

なお、調査から整理、報告に至るまで様々な方にご教示ご指導いただいた。記して謝意を表したい。

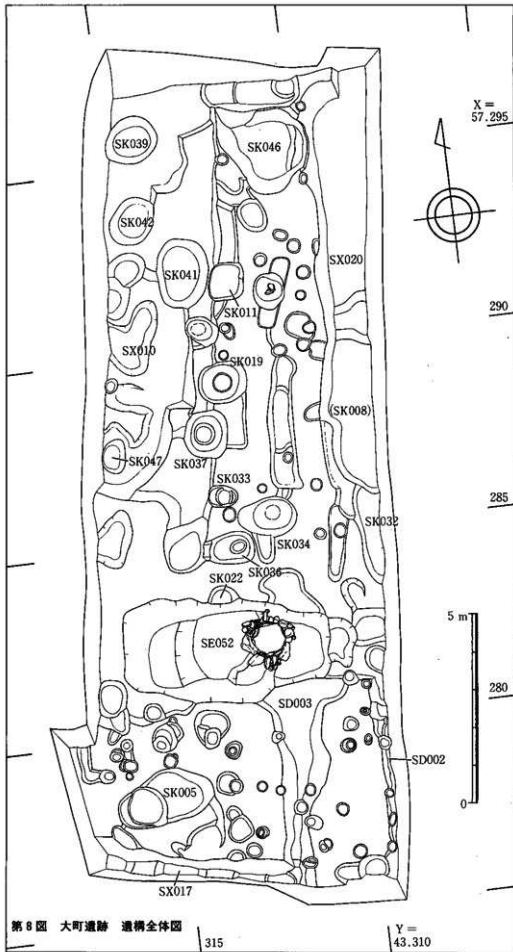
権藤正信（西日本鉄道株式会社電車局営業部営業運転課駅開発係）、城戸弘（同社不動産事業局ビル事業部）、小西信二（太宰府天満宮文化研究所）、岡本光山（陶芸家；野間焼）、高橋実（福岡市西花畑公民館）、近藤典二（古文書）、池畑祐樹（福岡県地方史研究所）、太宰府天満宮文化研究所、福岡市民図書館、太宰府市市史編纂室、（順不同。敬称略す。）

調査方法

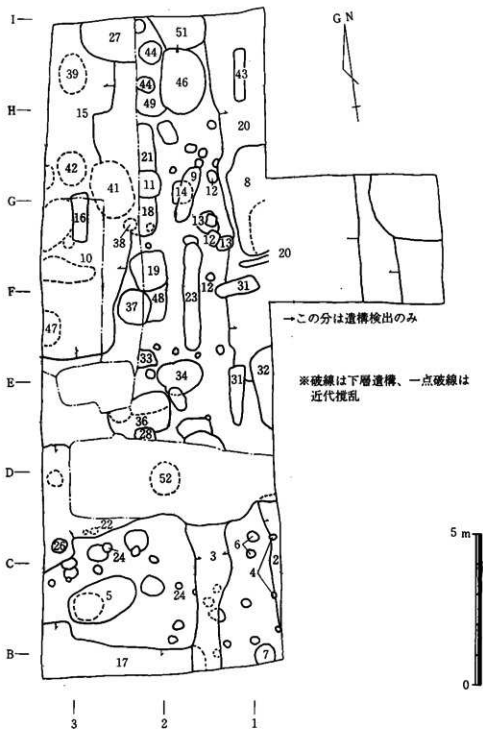
大町遺跡の発掘調査は太宰府市教育委員会が通常おこなっている調査のプロセスに乗り取り進行させた。その概略は、表土から第3層までを重機（パワーショベル）を用いて除去し第4層上面から人力で清掃、遺構検出、掘り下げを繰り返す。遺構の記録は3メートルメッシュで設定した任意方向のグリッドを用い、遺構検出時に切り合い関係を主眼とする略図を1/100スケールで作成し（第10図）、さらに掘り下げ後に検出される遺構を破線で記入ゆく。各遺構の掘り下げは視覚認識できる層位本位でおこなわれ、遺物もそれに基づいて取り上げて行く。土層は略図で記録され必要に応じて断面実測図を作成している。個別遺構も必要分が1/20スケールで実測され、全体図はすべての遺構が掘上がった時点で写真測量をおこない機械図化している。図化に当たっては国土座表系に基づく座標を与えている。なお、遺構番号は現場では遺構の性格に関係なく「S-1」のように通しのS番号を付与し、整理の時点で性格を限定できる遺構について「1SD001」に変換している。この際、遺構の統廃合がないかぎり数字の変更はおこなわない。変換後の冒頭に付く数字は調査回数である。

整理方法

遺物整理について概略を記す。現場から持ち帰った遺物は洗浄、注記し、選別をおこなう。選別に際し「出土遺物一覧表」にすべての遺物について種別、型式、点数などが記入され、必要と思われる遺物がここで抽出され、保存処理、実測、計測、復元、写真撮影をおこなう。実測された遺物には「R-001」などのR番号が、計測のみの遺物にはaやcといったあらかじめ設定した遺物の型式名を付けた3ケタの通し番号が付与される。



第 8 図 大可遺跡 遺構全体図



第9図 大可遺跡 遺構検出時略図

3. 遺跡の調査

層序

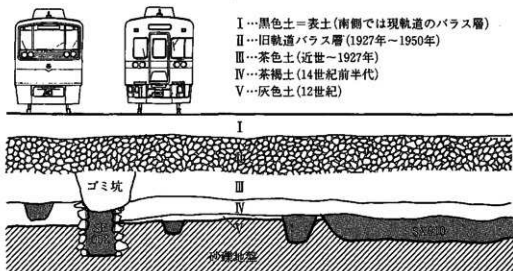
大町遺跡の現在使用している生活面下の土層は第8図に示す通りである。

第1層は現在の地表層で黒色化している。第2層は片岩系の角礫を用いた礫層で昭和25年まであった旧プラットホームの軌道下に敷かれていたバラス層であろう。第3層は茶色土層である。この層の上面からレンガなどの建物廃材を入れた大きな廃棄土坑が多く切り込み、これら廃棄土坑が昭和2年に整備された駅舎建築に先だっておこなわれた整地に伴うものだとすれば、伴出する遺物からこの層は近世から近代にかけて形成されたものと考えられる。井戸 SE052はこの層位に伴うものと思われる。第4層は茶褐色を呈し14世紀前半代に形成されたもので多くの遺構を伴っている。第5層としている灰色土層は部分的にしか存在しない。おそらく12世紀代の形成層であろう。この層で地表下約180センチである。

これら文化層の基盤をなすのは第3紀に形成されたと思われる長石、石英粒からなる礫と粗砂の層で、そのさらに2メートルほど下に花崗岩の風化岩盤がある。(第2図参照)

遺構と遺物

大町遺跡で検出した遺構は土坑 (SK)、井戸 (SE)、溝 (SD) とその他性格不明の遺構 (SX) である。以下この順に説明する。



第10図 大町遺跡土層概念図

(1) 土坑

検出プランが円、楕円形を呈するもので壁が急勾配で立ち上がり、人的な掘削によって形成されたと判断しうるもの。俗に言うピットとの区分はしていない。

遺構

1 SK005 (第11図、Pla 3 - 1)

調査区の南側にある遺構で上面が楕円形を呈し、下位は礫がつまった円筒形の坑へと移行している。覆土は灰色土、黒灰土の順で堆積している。

1 SK011 (第11図、Pla 4 - 1・2)

中世の堆積層を持つS-18を切る隅丸方形を呈す遺構で、灰茶色を呈す埋土などから近世のものと思われる。七輪の破片が出土している。

1 SK019 (第11図、Pla 3 - 2)

円筒状の2段の掘方を持つ。遺物はほとんどなく、灰色系の埋土を持つ。5層に伴うものか。

1 SK022 (第11図、Pla 3 - 1)

削平によってごくわずかに残った直径30センチほどの坑で、黒色系の埋土を持つ。土器は床面から浮いて傾いた状態で出土している。ほかに供伴する遺物は1点も無い。

1 SK033 (第11図、Pla 3 - 2)

2段掘りの坑で灰色系の埋土を持つ。第5層に伴うものか。

1 SK034 (第11図、Pla 3 - 2)

床面の中央が窪み直径が1メートルを超える大きめの坑。埋土は暗灰土、黄灰土の順で堆積。

1 SK036 (第12図、Pla 3 - 2)

浅い2段掘りを呈す。暗灰土が堆積する。

1 SK037 (第11図、Pla 3 - 2)

直径が1メートルほどで円筒形を呈す坑。埋土は黒灰色、淡灰色の順。1 SK019に隣接する。

1 SK038 (第12図、Pla 3 - 2)

中央が窪み円筒形を呈す坑。

1 SK039 (第12図、Pla 4 - 1・2)

1 SK010除去後に検出された楕円形を呈す坑。黒色土で埋没する。

1 SK041 (第12図、Pla 4 - 1・2)

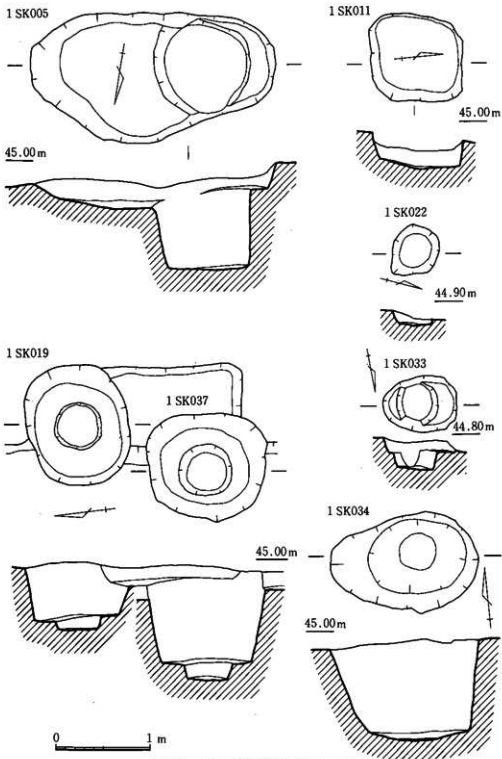
これも1 SK010除去後に検出された楕円形を呈す坑。黒灰色土で埋没する。礫が多く入る。

1 SK042 (第12図、Pla 4 - 1・2)

これも1 SK010除去後に検出された楕円形を呈す坑。黒灰色土で埋没する。

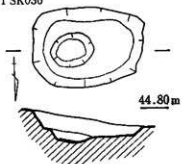
1 SK046 (第12図、Pla 4 - 1・2)

長辺が2メートルある楕円形を呈す坑。茶灰土で埋まり、近世の遺物を出す。

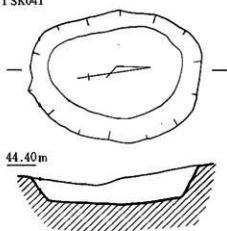


第11圖 大町遺跡土坑実測図1 (1/60)

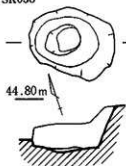
1 SK036



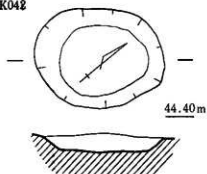
1 SK041



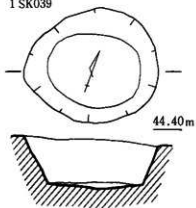
1 SK038



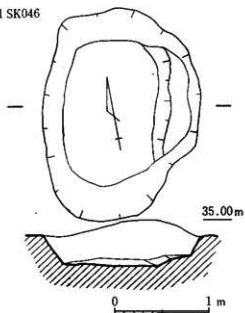
1 SK042



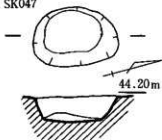
1 SK039



1 SK046



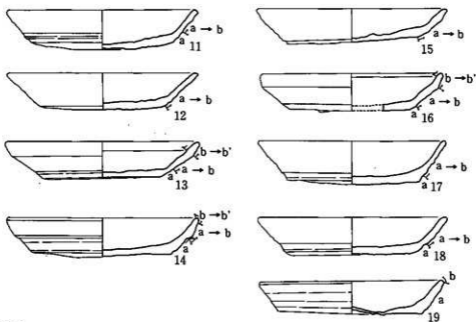
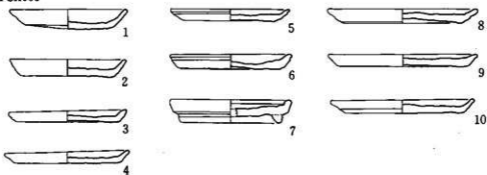
1 SK047



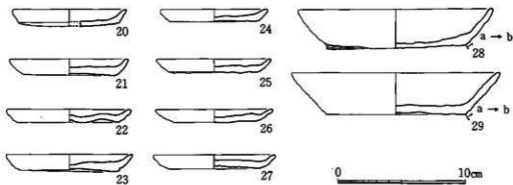
0 1 m

第12圖 大町遺跡土坑実測図2 (1/60)

1 SK005



1 SK019



第13圖 大可遺跡土坑出土土器実測圖1 (1/3)

1 SK047 (第12図、Pla 3-2)

これも1 SK010除去後に検出された楕円形を呈す坑。黒灰色土で埋没する。

遺物

1 SK005出土遺物 (第13図、Pla 5-1-6)

土師器

小皿 a (1-6・8-10) 1はヘラ切り。口径9.3cm、器高1.5cm。2-6・8-10は糸切り。小型品と大型品の二種類があり、前者は口径8.4-10.4cm、器高0.6-1.6cm。後者は口径11.3-11.8cm、器高1.0-1.1cm。5と6は外面口縁下に、先の細いヘラ状工具による沈線が1条めぐる。XIV-XV期か。

小皿 c (7) 糸切り。口径9.5cm、器高1.8cm。小皿 a に高台が付いた形態である。

坏 a (11-19) 11・12はヘラ切り。口径15.0cm、器高2.9-3.1cm。13-19は糸切り。口径14.0-16.6cm、器高2.1-3.4cm。体部はほぼまっすぐに外上方に開く。体部外面にナデ a を施すものが多い。また、口縁部のみ再調整するものもある。XIV-XV期か。

1 SK019出土遺物 (第13図)

土師器

小皿 a (20-27) 図示したものは糸切り。他にヘラ切りの小片が2点ある。口径8.4-10.2cm、器高0.8-1.3cm。XIV-XV期か。

坏 a (28・29) 糸切り。口径15.4-16.8cm、器高2.5-3.2cm。体部外面は、ナデ a を施した後、再度底部との境からナデ b を加える。また、28には体部外面下位に、ロクロの回転方向と一致して、ラセン状にねじれたような跡が認められる (44頁-4)。XIV-XV期か。

1 SK022出土遺物 (第14図、Pla 5-7)

黒色土器

碗 C 2 (30) B類。口径15.6cm、器高5.4cm、底径6.75cm。体部は緩やかに内湾しながら開き、口縁部付近でわずかに外反する。底部には断面逆台形の短い高台が付く。内外面ともややていねいなミガキ c が施され、内面においては、こきざみに往復するミガキが施される。外底面にはミガキはない。また、見込み部分はジグザグにミガキを施し、交し状の暗文を形成する。口縁内面には、ミガキ後沈線を1条施す。内外面とも十分に黒化処理がなされる。形態的には畿内楠葉窯で焼かれた製品を踏襲しているが、内外面におけるミガキに省略化の傾向が顕著に認められ、広義の楠葉系黒色土器 B 類にあたる。

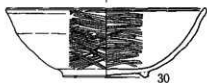
1 SK034暗灰色土層出土遺物 (第14図)

土師器

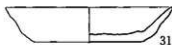
坏 a (31) 糸切り。口径13.2cm、器高2.7cm。

1 SK034出土遺物 (第14・15図、Pla 5-8)

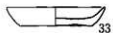
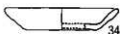
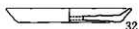
1 SK022



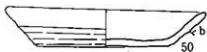
1 SK034 暗灰色土層



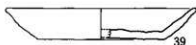
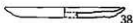
1 SK034



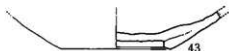
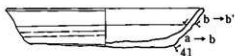
1 SK038



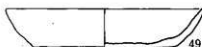
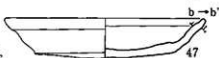
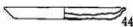
1 SK037



1 SK037 淡灰色土層



1 SK037 黑灰色土層



第14圖 大町遺跡土坑出土土器実測圖 2 (1/3)



第15図 大町遺跡土坑出土土器実測図3 (1/4)

土師器

小皿 a (32) 糸切り。口径7.4~9.9cm、器高0.8~1.1cm。

小皿 b (33) 糸切り。口径7.7cm、器高1.4cm。口径に対し器高がやや低いと思われるが、一応小皿 b とした。

小坏 a (34) 糸切り。口径9.0cm、器高1.7cm。

坏 a (35) 糸切り。口径13.1cm、器高2.7cm。

鉢 (37) 口径45.5cm、器高10.5cm、底径31.4cm。口縁はL字形を呈し、端部がわずかに上方に屈折する。胎土中には粗砂を多量含む。内面には火を受けた痕跡は認められない。

陶器

甕 (36) 口径21.2cm。胎土は白色の粗砂を含み、器面は茶褐色を呈する。口縁内面には自然釉がかかる。常滑産。口縁端部の形状より、常滑編年の第Ⅲ期に相当するものである。

1SK037出土遺物 (第14図)

土師器

小皿 a (38) 糸切り。口径9.4cm、器高0.8cm。

坏 a (39) 糸切り。口径15.0cm、器高2.5cm。

1SK037淡灰色土層出土遺物 (第14図)

土師器

小皿 a (40) 糸切り。口径8.0cm、器高1.0cm。

坏 a (41・42) 糸切り。口径15.5~16.4cm、器高3.1~3.3cm。いずれも体部外面下位にナデaが認められる。

陶器

鉢 (43) VI-1類。底径8.4cm。胎土は灰白色で黒斑を含む。底部は萁筒底。釉調は淡灰緑色で、全面に施釉される。

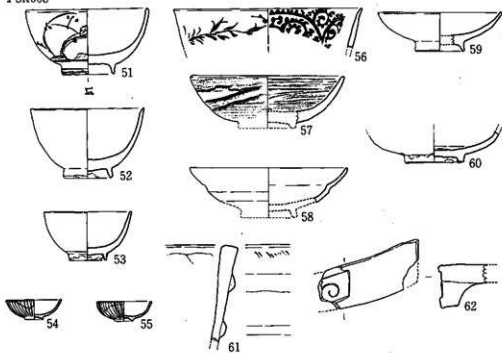
1SK037黒灰色土層出土遺物 (第14図)

土師器

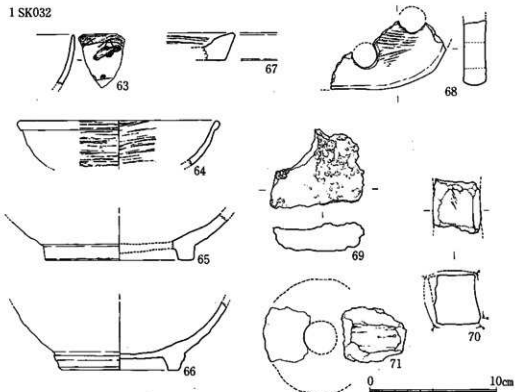
小皿 a (44・45) 糸切り。口径9.4~9.6cm、器高0.9~1.0cm。

坏 a (46~49) 糸切り。口径15.5~16.6cm、器高2.7~3.3cm。46には幅の0.3cmの細かな

1 SK008



1 SK032



第16圖 大町遺跡土坑出土土器実測圖4 (1/3)

ナデアが、体部外面上位まで施される。XIV～XV期か。

1 SK038出土遺物 (第14図)

土師器

坏a (50) 糸切り。口径15.8cm、器高2.9cm。体部外面下半にナデアと思われる痕跡が認められる。

1 SK008出土遺物 (第16図、Pla 6-1・2)

肥前系磁器

碗 (51・52・53)

51・52・53は丸碗である。51は胴部下半と高台に圈線が胴部には草様の文様が呉須で描かれ染め付けである。口径9.8cm、器高5.1cm、底径4.2cm。52は無文で口径に対し底径が小さい。口径9.0cm、器高5.4cm、底径3.9cm。53は全体の法量が小さいちよこ様のもので胴部下半に染め付けの圈線を持つ。口径6.8cm、器高3.8cm、底径3.1cm。

鉢 (56)

56は口径が15cmほどで、外面に草様文、内面は塘草文様を持つ。

紅皿 (54・55)

54、55は合わせ型作りの紅皿である。外面は肉彫りで花卉状を表現している。全体にゆみがある。法量は両者ともに口径4.4cm、器高1.6cm、底径1.5cm。

硬質陶器 (57・58・59・60)

碗 (57)

口径が12.2cmのやや浅い碗。白土を用いたヨコ方向の刷毛目で裝飾する。

坏 (58・59)

58は胴部で一度くびれる唐津の系譜を引くもので、口径12.4cmを測る。59は全体の法量が小さく、浅い作りで蓋であった可能性もある。口径9.8cm、器高3.0cm、底径4.0cm。60は底径4.7cmで砂目を残し、内底は軸を輪状にカキ取る。

瓦質土器 (61)

深鉢型の火桶と思われ、2条の貼り付け突帯を持つ。イブシは全体にかかる。

瓦

軒平瓦 (62)

瓦頭面部分の破片で瓦当面幅約3cm、本体の幅2cm。全体にイブシがかかる。

1 SK032出土遺物 (第16図、Pla 6-3・4)

肥前系磁器

碗 (63)

染め付け丸碗の口縁部片。

硬質陶器

鉢 (65・66)

ボウル状の深めの鉢で茶褐色の鉄釉を施す。両者とも高台はケズリだしによる。

素焼土器 (67・68)

67は内面をクシ状の工具で粗いナデを施すもので、盤もしくは蓋になるもの。68はカーブを持つ板状のもので円孔を穿つ。七輪の棧か。生産関連遺物 (69・70・71)

69は金属質の缸滓である。70は天草産と思われる赤いラミナの入る砂岩製の棒状の砥石。71は外径9cmほどのフィゴの羽口。あまり焼けていない。

(2) 井戸

遺構

1 SE052 (第17図、Pl.3-1)

旧軌道 (1950年まで) 直下のカクラン (建物廃棄物処理坑) を除去した時点で検出した遺構で、第3層に伴うものであろう。中小の花崗岩を組み合わせた石井で、基本的に左下から右上の斜方向に石を組んでいる。旧宰府村にはこのような石井が最近まで数多く残されていたが、近年の再開発等で次々と姿を消している。

遺物

1 SE052出土遺物 (第18図)

多量の瓦、レンガ等の瓦礫とともに多くの生活関連遺物が出土している。

陶磁器

碗 (72-77・79・80)、鉢 (78)

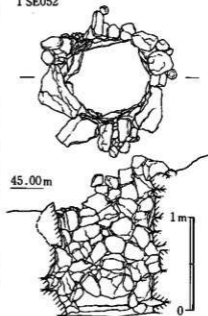
大半がプリントもので碗には飯茶碗と湯飲み茶碗がある。77は胴部外面に日本旧海軍の「サクラにイカリ」のロゴが入るもので、口縁は玉縁を呈し底は萁筒底状になる。表土層から出土したものを含めると4個体以上の同一規格のものが出土している。78は一般的な鉢であるがこのほかに変形平鉢や向付など多数出土している。

酒瓶 (81・82)

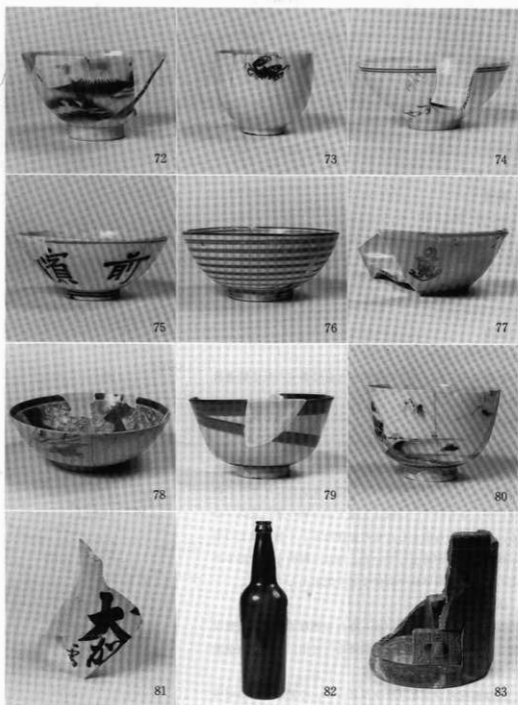
81は「大賀」の文字が読み取れる酒瓶である。大賀は隣宿場町内の二日市 (現筑紫野市二日市) にある酒造屋のものか。

82は桜花のロゴと「サクラビール」の名が見えるビール瓶で、形成に型を用いている。日本では明治維新以来、

1 SE052



第17図 大町遺跡井戸実測図 (1/40)



第18図 大町遺跡SE052(井戸)出土遺物写真

輸入商品とともに中小のイギリス系とドイツ系の2系統の国産メーカーのビールを消費してきたが、帝国覇権主義の台頭で大正時代から物資統制が進む中、ビールメーカーも大正3年に大粋で大日本麦酒、麒麟麦酒、加富登麦酒、帝国麦酒の4社に吸収統合された。さらに昭和18年には企業整備令の適用を受け大日本麦酒と麒麟麦酒の2社になっている。出土したサクラビールがどの時期のものであるのか興味があるが、遺構の土層関係より昭和2（1927）年以前のものであるといえる。ちなみに博多東中州を写した大正末期と昭和7年の写真にはサクラビールの広告塔が見えている（「ふるさとの思い出写真集 昭和 大正明治 博多」1979年 国書刊行会 P119・136）。

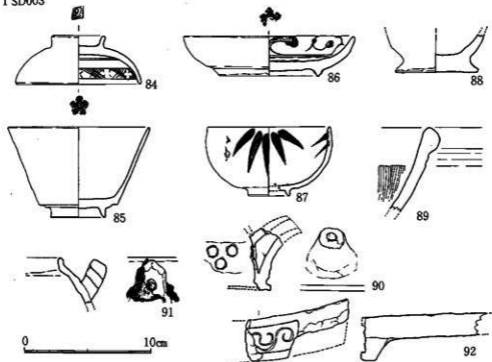
(3) 溝

遺構

1 SD003 (Pl.3-1)

1 SD003は調査区を南北に走る溝状遺構でS-23や9も埋土の色などからこれに関連するものと見られる。重機で除去した第3層（茶色土層）にはこの溝の位置に石垣の跡と思われる石列が見られ、近世後半から近代にかけてこのラインが土地境であったと考えられる。埋土は茶色土である。

1 SD003



第19図 大町遺跡溝出土土器実測図(1/3)

遺物

1 SD003出土遺物（第19図、Pla 7-1・2・3・4）

磁器（84・85・86）

84は碗蓋で口径10.0cm、器高3.8cm、つまみ径4.2cmを測る。内底にコンニャク印を押す。85は体部が直線的に開く碗で、口径11.2cm、器高7.1cm、底径4.4cmを測る。曇み付けは軸ハギをおこなう。86は口径13.4cm、器高3.1cm、底径7.8cmを測る小皿である。内底は輪状に軸ハギをしコンニャク印を押す。

硬質陶器（87）

87は小さな高台に張りのある胴部を持つ湯飲茶碗で内底にハリの目跡が残る。彩色は緑で竹葉を赤、白で他の文様を描く。

軟質陶器（88・89・90・91）

88は胎土が素焼質で暗茶褐色の釉がかかる壺型のもので底径6.5cmを測る。89は口縁が玉縁で内面のスリ目が隙間なく施される摺鉢。胎土は赤褐色で茶褐色の鉄釉をかける。90は平底の油差しで素焼きの胎土に茶褐色の釉をかける。91は土瓶の口縁と把手の取付け部分で一部アメ釉を重ねがけする。

瓦（92）

92は軒平瓦である。規格は1 SK008のもの（第15図62）と同じ。瓦当下面半にはイブシがかかっていない。

（4）その他の遺構

調査区の四隅にそれぞれ溜まり状の遺構が検出された。本来は溝や土坑である可能性がある。

遺構

1 SX010（第20図、Pla 4-1）

調査区の北西で検出された遺構で当初は土色の違いで北側をS-10、南側をS-15と分けて掘ったが、後に同一の遺構と判断した。暗灰色土、黒灰色土、灰色土、茶褐色土、黒灰色土（旧S-15）の順で堆積している。

1 SX002（第20図、Pla 3-1）

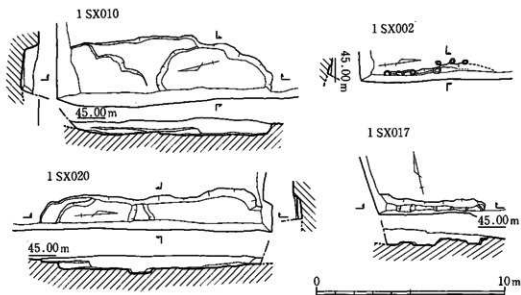
調査区の南東で検出した。遺物はほとんど出土していない。茶色土で埋没する。

1 SX020（第20図、Pla 4-1）

調査区の北東で検出した遺構で灰色土、灰粘土、黄灰色土の順で堆積する。一部東側に拡張したところ、西側へりから約6mのところ立ち上がりを確認した。

1 SX017（第20図、Pla 3-1）

調査区の南西にある東西に長い遺構で、底盤のアップダウンが著しい。暗灰色土で埋没する。遺物



第20図 大可遺跡その他の遺構実測図(1/200)

1 SX010 暗灰色土層出土遺物 (第21図)

土師器

小皿 a (93~95) 糸切り。口径7.6~8.6cm、器高1.0cm。

坏 a (96~98) 糸切り。口径12.2~13.0cm、器高2.5~2.7cm。

1 SX010 灰色土層出土遺物 (第21図)

土師器

坏 a (99) 糸切り。口径15.3cm、器高2.9cmであるが、小片のため不明確。

1 SX010 黒灰色土層出土遺物 (第21図)

土師器

小皿 a (100~102) 糸切り。口径8.4~9.6cm、器高0.8~1.5cm。101は内底に油煙が付着する。

坏 a (103) 糸切り。口径16.0cm、器高2.7cm。体部外面にナデaを施す。

1 SX015 黒灰色土層出土遺物 (第21図)

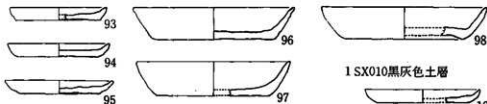
土師器

小皿 a (104~106) 糸切り。口径7.6~9.6cm、器高1.0~1.6cm。ⅩⅧ~ⅩⅩ期か。

小皿 c (107・108) 底部の切り難しは不明。口径7.6~8.0cm、器高1.85cm。小皿 a に高台が付く形態である。高台は体部との境よりやや内側に付く。

坏 a (109~116) 糸切り。口径11.8~16.0cm、器高2.1~3.0cm。口径15cm以上の3点を除

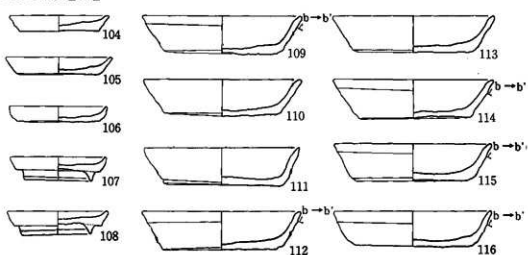
1 SX010暗灰色土層



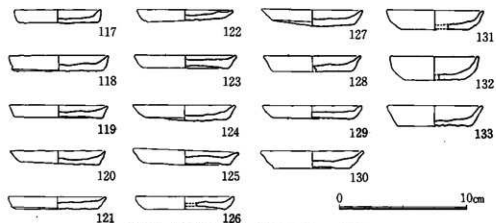
1 SX010灰色土層



1 SX015黑灰色土層



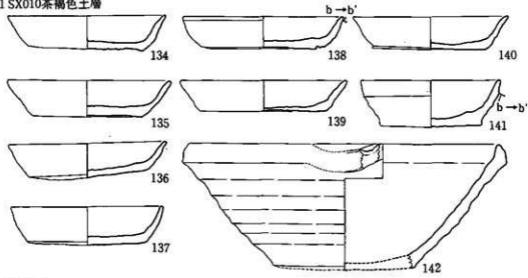
1 SX010茶褐色土層



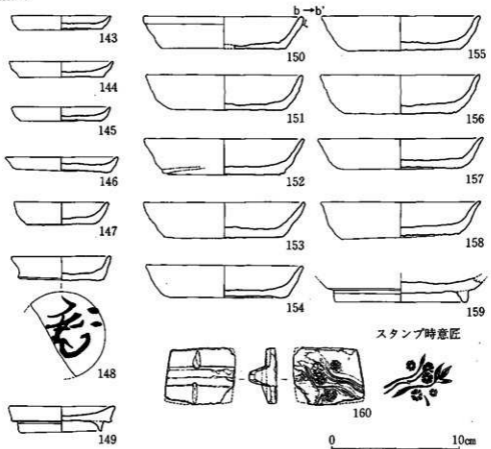
0 10cm

第21圖 大町遺跡SX出土土器実測圖1 (1/3)

1 SX010茶褐色土層



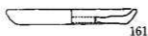
1 SX010



スタンプ時意匠

第22図 大町遺跡SX出土土器・石製品実測図2 (1/3)

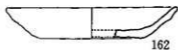
1 SX017



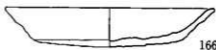
161



165



162

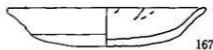


166

1 SX020



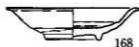
163



167

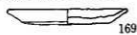


164

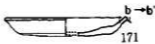


168

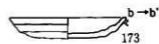
1 SX020 灰色粘質土層



169



171



173



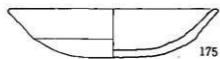
170



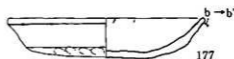
172



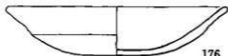
174



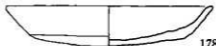
175



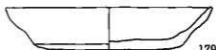
177



176



178



179

1 SX020 黄灰色土層



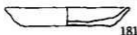
180



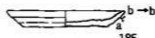
184



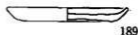
188



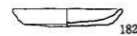
181



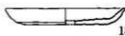
185



189



182



186



190



183



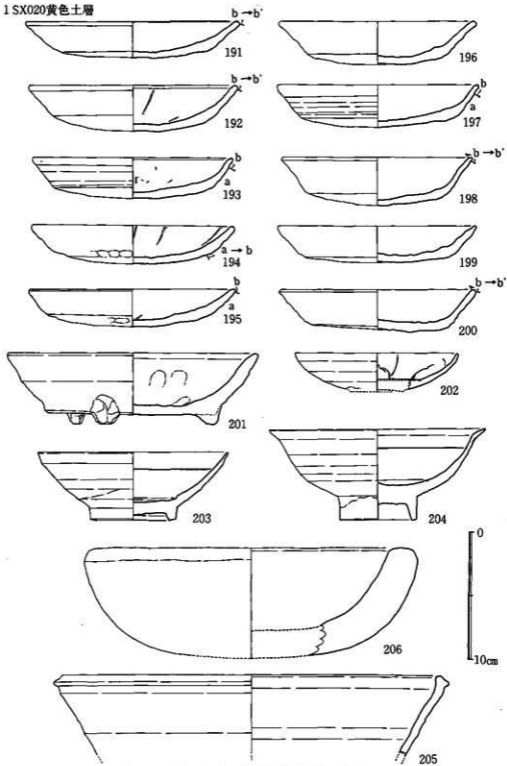
187



10cm

第23图 大可遺跡SX出土土器実測図3 (1/3)

1 SX020黄色土層



第24图 大町遺跡SX出土土器実測图4 (1/3)

いて、他は全て12.5cm前後に集中する。口縁部に再調整を加えるものが比較的多い。113の体部外面下位には、ネジリ様の跡が残る。115は口縁の一部に油煙が付着する。ⅩⅧ～ⅩⅨ期か。

1 SX010 茶褐色土層出土遺物 (第21・22図、Pla 7-5~8)

土師器

小皿 a (117~130) 糸切り。口径6.8~8.6cm、器高0.9~1.35cm。体部は短く直立気味で、口縁端部はつまんだように尖る。ネジリ様の痕跡が残るものが5点ある。123は内面に油煙が付着する。ⅩⅩ期。

小皿 b (131~133) 糸切り。口径7.0~7.6cm、器高1.5~1.85cm。

杯 a (134~141) 糸切り。口径11.0~14.0cm、器高2.4~3.6cm。体部はやや直立気味で、口縁端部を丸くおさめるものと、口縁近くでやや外反し、端部が先細りとなるものがある。136と140の体部外面下位にネジリ様の痕跡がある。141は他のものに比べ、口径が小さく、器高が高い。調整も成形後、体部外面に下位から中位まで、再度強くナデ b を加え、やや特殊な器形となっている。ⅩⅩ期。

須恵質土器

鉢 (142) 片口。胎土は淡灰色で粗砂を含む。体部はやや短く、内湾気味に開く。口縁部は垂直に立ち、端部は尖る。外面の稜は鋭い。口径25.6cm、器高9.7cm。東播系。

1 SX010 出土遺物 (第22図、Pla 8-1~5)

土師器

小皿 a (143~146) 糸切り。口径6.4~8.9cm、器高0.8~1.4cm。体部は短く。口縁部は尖り気味。143と144は底部付近にネジリ様の痕跡がある。ⅩⅨ~ⅩⅩ期か。

小皿 b (147~148) 糸切り。口径7.5~8.8cm、器高1.8~2.0cm。148は外底に墨書が残るが、解釈不明。

小皿 c (149) 底部切り離しは不明。口径8.9cm、器高2.0cm。小皿 a に高台が付いた形態。高台は体部との境よりやや内側に付く。

杯 a (150~158) 糸切り。口径12.0~14.4cm、器高2.2~3.1cm。体部は立ち気味で、直線的なもの、口縁付近で外反するものがある。152~154は体部外面下位にネジリ様の痕跡がある。ⅩⅨ~ⅩⅩ期か。

皿 c (159) 糸切り。底径10.3cm。

石製品 (160)

滑石の石鍋のツバの部分を利用したもので、たなびく草葉に菊花が添えられた意匠を持つ。平面は5.5×4.5cm、厚さ2.2cm。土器や鋳物等の工芸品の製作に係わるものか。

1 SX017 出土遺物 (第23図)

土師器

小皿 a (161) 糸切り。口径9.0~10.0cm、器高0.7~1.2cm。

坏 a (162) 糸切り。口径12.8~14.6cm、器高2.2~3.5cm。

1 SX020 出土遺物 (第23図)

土師器

小皿 a (163・164) 163はヘラ切り、164は糸切り。糸切りはこの1点のみ。口径9.0~10.0cm、器高1.1~1.3cm。ⅩⅢ期。

坏 a (165・166) ヘラ切り。口径15.8~16.4cm、器高3.05~3.1cm。

丸底坏 a (167) ヘラ切り。口径15.6cm、器高3.0cm。内面にミガキ b を施す。

白磁

皿 (168) Ⅲ-1類。口径10.4cm、器高2.5cm、底径4.4cm。胎土は灰白色で密。軸調は淡灰緑色を呈し、体部外面下位は露胎。見込みの軸を輪状に掻き取る。

1 SX020 灰色粘質土層出土遺物 (第23図、Pl. 9-1-3)

土師器

小皿 a (169~174) ヘラ切り。口径9.2~9.8cm、器高1.05~1.6cm。ⅩⅡ~ⅩⅢ期。

丸底坏 a (175~177) ヘラ切り。口径15.3~17.4cm、器高2.7~3.8cm。内面にミガキ b が施され、177は体部外面下位に指頭圧痕が顕著に残る。

坏 a (178・179) ヘラ切り。口径15.7~16.2cm、器高2.8~3.3cm。178は底部を押し出した痕跡はないが、底部が膨らみ気味で、体部内面の底部からの立ち上がり丸味をおびる。このタイプのものは図示したもの以外に数点ある。ⅩⅡ~ⅩⅢ期。

共伴した白磁碗皿類と皿Ⅲ類は過去のデータでは12世紀中頃以降安定して出土しており、本例はそれの先行する形で出土したことになる。

1 SX020 黄灰色土層出土遺物 (第23・24図、Pl. 9-4-13)

土師器

小皿 a (180~190) 180~187はヘラ切りで、口径8.7~9.8cm、器高1.2~1.45cm。188~190は糸切りで、口径9.0~9.8cm、器高1.0~1.2cm。ⅩⅢ期。

丸底坏 a (191~195) ヘラ切り。口径15.6~17.6cm、器高2.4~3.55cm。内面にミガキ b が施される。193・195は体部外面にナデ a が認められる。

坏 a (196~200) 196~198はヘラ切りで、口径15.0~16.2cm、器高2.85~3.75cm。199・200は糸切りで、口径15.0~16.8cm、器高2.85~3.2cm。196~198は底部に膨らみを持つタイプ。このタイプは比較的多く見られる。ⅩⅢ期。

三脚付鉢 (201) 口径19.8cm、器高5.6cm。底部切り離しは、上からナデ調整を加えているため不明。体部との境に小さな脚が三ヶ所付く。体外面にスガが付着。

白磁

皿 (202) V-2 b類と思われる。口径12.8cm。胎土は淡黄白色。釉調は黄白色を呈し、体部外面下位は露胎。見込みにヘラ掻き文を施す。

碗 (203・204) 203はV-2類。口径15.0cm、器高5.3cm、底径6.8cm。胎土は灰白色で中に細かな黒斑を含む。釉調は淡黄灰色を呈し、見込みの釉を輪状に掻き取る。204はV-2 a類。口径17.0cm、器高7.1cm、底径6.1cm。胎土は灰白色でやや粗い。釉調は淡灰色を呈する。

須恵質土器

鉢 (205) 口径31.0cm。片口と思われる。胎土は暗灰色で、外面口縁部は黒灰色を呈する。粗砂を少量含み粗い。東播系。

トリベ (206) 口径26.4cm、器高8.5cmの大型品。内面は黒ずんでおり使用した痕跡は認められるが、剥落が著しく、付着物については不明。

これら紹介した遺物のほか、各層位ごとに取り上げた遺物が数多くあるが、ここでいくつかの遺物について解説しておく。

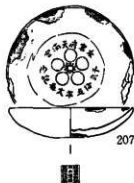
茶褐色土は遺構面を広く覆う包含層であるが、多量のⅤⅢ期を主体とする遺物を出土している (Pla 8-6・7・8・9)。土師器がほとんどで割合として陶磁器が少ない。瓦質の分銅型の土製品も出土している。法量は6.3×4.5×1.0cm。

表土の黒色土からも中世から近代に至るまでの多種類の遺物を出土している (第25図、Pla 8-10・11)。Pla 8-11は中国の同安窯系の青磁碗である。法量は口径13.4cm、器高3.1cm、底径7.8cm。

Pla 8-10は染め付け磁器の小碗であるが、筑前須恵焼の採集品の中に類似した物があり、須恵焼である可能性がある。法量は口径13.4cm、器高3.1cm、底径7.8cm。

第25図は素焼きの土師皿である。ロクロ成形後内型に当てて内底の文様を浮きだたせ、仕上げにもう一度ナデている。外底は萆苴底で「福岡市皿山澤田製陶所」のスタンプを押す。内底の文様は、中心に太宰府天満宮の梅鉢文を置き、周りに「太宰府天満宮 千式拾五年大祭記念」の文字を配す。口縁にはススが数ヶ所あり、灯明皿として使用されたと考えられる。千式拾五年の大祭は昭和2 (1927) 年におこなわれた。産地の野間焼については後述する。

これらの遺物のほか縄文時代後、晩期に該当するフレーク・コアを含む石器と、二枚貝の腹縁で施したと思われるナデを有する土器片が複数の遺構、層位で検出されており、これらの遺物は当該期の文化層こそないものの、新町遺跡3次調査で検出された生活面につながる資料である。



第25図 大町遺跡表土出土
遺物実測図 (1/3)

土師器の法量表

○×

○×

(凡例) A. 番号 B. 辨別番号 C. 内底のナデの有無 D. 板状底痕の有無
 ◎. 黒色土器 ○. 瓦器 単位cm

茶褐色土器

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (糸)	R001		7.9	1.2	6.7	○	○
	R002		7.6	0.9	7.1	○	○
	R003		7.5	1.1	6.6	○	○
	R004		7.7	1.1	6.9	○	○
	R005		8.2	1.0	6.5	○	○
	R006		7.5	1.0	6.4	○	○
	R007		7.5	0.8	6.3	○	○
	R008		8.0	1.6	6.5	○	○
	R009		8.2	1.1	7.0	○	○
	R010		8.2	1.1	7.0	○	○
	R011		8.2	1.2	7.5	○	○
	R012		8.6	1.2	6.7	○	○
	R013		8.2	1.0	6.7	○	○
	R014		7.4	1.1	6.8	○	○
	R015		7.3	1.2	6.4	○	○
	R016		8.5	1.1	6.6	○	○
	R033		8.6	1.2	6.6	○	○
	R034		8.4	1.3	7.4	○	○
	R035		8.0	1.0	7.4	○	○
	R036		8.0	1.1	7.0	○	○
	R037		7.4	1.0	6.5	○	○
	R038		8.0	0.95	7.8	○	○
	a 1		7.6	1.0	6.0	○	○
	a 2		7.8	0.9	6.8	○	○
	a 3		7.6	1.0	6.8	○	○
	a 4		8.2	1.1	7.0	?	○
	a 5		9.0	1.6	6.6	○	○
	a 6		8.0	0.8	6.8	○	○
	a 7		8.0	1.1	6.8	○	○
	a 8		8.0	0.9	6.8	○	○
	a 9		8.6	1.2	6.6	○	○
	a 10		8.4	1.1	8.0	○	○
	a 11		9.0	1.1	8.4	○	○
	a 12		8.0	1.1	6.8	○	○
	a 13		8.2	1.0	7.0	○	○
	a 14		9.0	1.0	7.6	○	○
	a 15		8.6	1.0	7.2	○	○
	a 16		8.0	1.2	6.6	○	○
	a 17		8.0	1.0	5.6	○	?
	a 18		8.6	1.2	7.4	○	○
	a 19		8.4	1.1	7.4	○	○
	a 20		7.8	1.0	6.2	○	○
	a 21		7.4	1.3	6.4	○	○
	a 22		8.0	1.1	7.0	○	×
	a 23		8.2	1.0	7.0	○	○
	a 24		8.2	1.2	6.0	○	○
	a 25		8.2	1.0	7.5	○	○
	a 26		8.5	1.05	7.8	○	○
	a 27		8.2	1.1	7.8	○	○
	a 28		8.0	1.25	7.3	○	○
	a 29		8.0	1.05	7.1	○	○
	a 30		7.0	0.95	5.9	○	○
	a 31		7.4	1.05	6.0	○	○
	a 32		8.0	1.1	6.8	○	○
	a 33		8.0	1.4	6.6	○	○
	a 34		8.2	1.15	6.7	○	○
	a 35		8.2	1.3	6.8	○	○

	a 36		8.0	1.1	6.8	○	○
	a 37		7.4	1.0	6.7	○	○
	a 38		8.4	1.0	7.2	○	○
	a 39		8.0	1.2	6.4	○	?
	a 40		8.0	1.0	6.6	○	○
	a 41		7.6	0.9	6.6	○	○
	a 42		7.8	1.0	6.4	○	○
	a 43		8.2	0.9	6.2	○	○
	a 44		8.6	1.05	7.8	○	○
	a 45		8.0	1.3	7.0	○	○
	a 46		8.0	1.1	7.0	○	○
	a 47		7.4	1.0	6.6	○	○
	a 48		9.0	0.9	7.7	○	○
	a 49		8.8	1.35	8.4	○	○
	a 50		7.6	1.0	6.7	○	○
	a 51		7.4	1.2	6.0	○	○
	a 52		8.0	0.95	6.8	○	○
	a 53		8.0	1.0	7.2	○	○
	a 54		7.6	0.85	6.6	○	○
	a 55		8.0	1.05	6.9	○	○
	a 56		8.0	1.0	6.9	○	○
	a 57		8.5	1.45	7.4	○	○
	a 58		8.2	1.1	7.4	○	○
	a 59		8.2	1.1	6.5	○	○
	a 60		8.4	1.15	7.0	○	○
環 a (糸)	R017		12.8	2.6	9.3	○	○
	R018		12.5	2.8	9.2	○	○
	R019		12.7	2.8	9.1	○	○
	R020		12.2	2.6	10.0	○	○
	R021		12.3	2.4	8.8	○	○
	R022		12.3	2.6	9.5	○	○
	R023		14.0	2.8	10.2	○	○
	R024		12.8	2.6	9.9	○	○
	R025		12.4	2.4	9.6	○	○
	R026		12.4	2.6	9.6	○	○
	R027		13.2	2.9	9.7	○	○
	R028		11.0	2.85	8.2	○	○
	R029		13.4	2.7	9.75	○	○
	R030		12.4	2.5	8.65	○	○
	R031		13.0	2.75	9.8	○	○
	a 1		12.6	2.8	9.2	○	○
	a 2		13.4	2.7	9.0	○	○
	a 3		12.2	2.9	9.0	○	○
	a 4		12.2	2.9	9.6	○	○
	a 5		13.0	3.2	8.8	○	○
	a 6		12.0	2.5	8.8	○	○
	a 7		12.4	3.0	9.4	○	○
	a 8		13.4	2.7	10.2	○	○
	a 9		12.6	2.7	9.0	○	○
	a 10		12.4	2.7	10.0	○	○
	a 11		14.8	2.5	7.8	○	○
環 b (糸)	R032		12.3	3.0	6.5	○	○
S K 005							
器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (ヘラ)	R015	1	9.3	1.5	7.1	○	×
小皿 a (糸)	R010	2	9.2	1.3	7.3	○	×
	R011	6	9.6	1.2	8.3	○	○
	R012	5	9.4	0.9	7.1	○	○

R013	4	9.9	0.9	8.5	○	○	
R014	3	9.3	0.9	8.2	○	○	
R016	10	11.3	1.1	9.3	○	○	
R017	9	11.8	1.0	10.2	○	○	
R018	8	11.8	1.1	9.6	○	×	
a 1		9.0	0.9	7.0	○	○	
a 2		8.4	1.1	7.0	○	×	
a 3		10.0	1.1	9.0	○	○	
a 4		9.0	0.9	8.0	○	×	
a 5		8.8	0.7	7.2	○	○	
a 6		9.2	1.6	7.0	○	○	
a 7		9.4	0.8	8.0	○	○	
a 8		10.4	1.2	9.0	○	?	
a 9		9.4	0.6	8.0	○	-	
a 10		11.4	1.1	10.0	○	○	
小環 c (糸)	R019	7	9.5	1.8	8.2	○	○
環 a (ヘラ)	R008	11	15.0	3.1	11.2	○	○
	R009	12	15.0	2.9	9.9	○	○
環 a (糸)	R001	18	14.9	3.0	9.5	○	?
	R002	13	15.3	2.9	9.3	○	○
	R003	14	15.1	3.0	11.0	○	×
	R004	15	15.0	2.7	10.3	○	○
	R005	16	14.4	2.9	9.5	○	○
	R006	19	14.5	2.6	11.4	○	○
	R007	17	14.8	3.4	10.5	○	○
	a 1		15.6	2.6	10.8	○	?
	a 2		15.4	2.8	10.8	○	?
	a 3		14.6	2.2	11.0	○	-
	a 4		15.0	2.6	11.0	○	○
	a 5		15.0	2.7	10.6	○	-
	a 6		15.6	2.6	10.0	○	-
	a 7		16.4	2.6	11.0	○	○
	a 8		14.0	2.1	10.0	○	-
	a 9		16.6	2.7	11.0	○	-
	a 10		15.6	2.7	12.0	○	-

S K Q10

群 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小環 a (糸)	R001	8.2	1.1	7.4	○	○	
	R002	8.3	1.0	7.4	○	○	
	R003	8.0	1.2	6.9	○	○	
	R004	8.0	1.4	6.1	○	○	
	R005	143	7.8	1.1	6.6	○	○
	R006		7.6	1.0	6.3	○	○
	R007		7.5	0.8	6.1	○	○
	R008		7.7	1.1	6.5	○	○
	R011	146	8.9	1.1	7.4	○	○
	R012	145	7.8	1.1	6.4	○	○
	R013	144	8.2	1.2	6.7	○	○
	R014		7.5	0.9	5.8	○	○
	R015		8.4	1.2	6.7	○	○
	R016		6.4	1.3	5.2	○	○
	a 1		7.6	1.0	7.0	○	○
	a 2		7.4	0.9	6.2	○	○
	a 3		8.4	1.1	7.4	○	○
	a 4		8.6	1.1	7.0	○	○
	a 5		8.6	1.3	8.0	○	○
	a 6		8.0	1.1	7.4	○	○
	a 7		8.6	1.0	7.0	○	○
	a 8		8.0	1.0	6.2	○	○
	a 9		7.6	1.3	7.0	○	○
	a 10		-	1.0	-	-	-
	a 11		7.6	1.0	5.4	○	-
	a 12		7.4	0.8	6.2	○	○
	a 13		8.0	1.0	7.4	○	○

小環 b (糸)	a 14		7.6	1.1	6.0	○	○
(縛書)	R009	147	7.5	1.8	5.6	○	○
	R010	148	7.9	1.9	6.9	○	○
	b 1		8.8?	2.0	6.0	○	×
小環 c	R017	149	8.4	1.3	7.9	○	○
				(2.0)	(6.5)		
環 a (糸)	R018	156	12.5	3.0	8.8	○	○
	R019	154	12.4	2.6	8.7	○	○
	R020	158	12.6	2.7	9.3	○	○
	R021		12.7	2.5	8.6	○	○
	R022		12.9	2.9	9.3	○	○
	R023	155	12.4	2.7	8.8	○	○
	R024		12.6	2.8	8.8	○	○
	R025	151	12.3	2.7	9.4	○	○
	R026		12.2	3.1	8.8	○	○
	R027	157	13.0	2.4	9.8	○	○
	R028	152	12.6	2.8	8.8	○	○
	R029		12.6	2.4	8.3	○	○
	R030	153	12.7	2.8	9.4	○	○
	R031	150	12.6	2.5	9.7	○	○
	R032		12.0	2.5	9.0	○	○
	a 1		12.6	2.9	12.0	○	○
	a 2		13.0	2.7	9.0	○	○
	a 3		12.8	2.5	9.4	○	○
	a 4		13.0	2.3	10.4	○	-
	a 5		12.6	2.2	9.4	○	○
	a 6		12.4	2.4	10.0	○	○
	a 7		13.0	2.8	10.4	○	○
	a 8		13.0	2.6	9.0	○	○
	a 9		14.4	2.7	11.0	○	○
環 c	R033	159			10.3	○	○

S K Q10茶褐色土層

群 種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小環 a (糸)	R001	129	7.8	1.0	6.2	○	○
	R002	118	7.8	1.2	7.2	○	○
	R003	119	7.6	1.0	7.0	○	○
	R004	127	7.8	1.3	6.5	○	○
	R005	120	7.8	1.0	6.3	○	○
	R006	125	8.3	1.2	6.8	○	○
	R007		7.8	0.96	6.6	○	○
	R008	122	7.6	0.9	5.7	○	○
	R009		7.9	1.1	6.6	○	○
	R010		7.5	0.9	6.8	○	○
	R011	121	7.7	1.0	6.5	○	○
	R012	123	8.0	1.0	6.6	○	○
	R013	124	8.1	1.2	6.4	○	○
	R014	130	8.1	1.35	6.0	○	○
	R015	117	6.8	1.0	6.2	○	○
	R016		7.7	0.9	6.4	○	○
	R017	128	7.6	1.2	6.2	○	○
	R018	126	7.8	1.0	6.3	○	○
	a 1		8.0	1.1	6.0	○	○
	a 2		7.6	0.9	7.0	○	○
	a 3		8.6	1.2	7.0	○	○
	a 4		7.6	1.1	6.4	○	○
	a 5		7.6	1.0	5.8	○	○
	a 6		7.6	1.2	7.0	○	○
	a 7		8.0	1.3	6.0	○	○
	a 8		8.0	0.9	6.0	○	○
	a 9		8.4	1.0	6.4	○	○
	a 10		7.0	1.0	6.0	○	○
	a 11		7.6	1.0	6.4	○	○
	a 12		8.0	1.0	7.0	○	?
	a 13		8.0	1.0	6.6	○	?

	a14		8.6	0.9	6.8	—	○
	a15		7.0	1.1	5.6	○	○
	a16		8.6	1.2	7.0	○	○
小皿 b (糸)	R019	133	7.5	1.6	5.8	○	○
	R020	132	7.0	1.85	4.8	○	?
坏 a (糸)	R021	131	7.6	1.5	5.3	○	?
	R022	140	12.3	2.5	9.0	○	○
	R023	136	12.4	2.7	9.4	○	○
	R024	134	12.4	2.5	9.0	○	○
	R025		12.2	2.4	8.8	○	○
	R026	137	12.0	3.0	9.5	○	○
	R027	139	13.2	2.4	9.8	○	○
	R028	138	12.6	2.5	9.6	○	○
	R029	135	12.9	2.8	8.6	○	○
	R030	141	11.0	3.6	8.6	○	○
	a1		14.0	2.5	8.8	○	?
	a2		13.0	2.5	8.4	○	○
	a3		13.6	2.8	8.0	○	○
	a4		12.4	2.5	9.0	○	○
	a5		12.4	2.5	8.8	○	○

S X 010 灰色土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
坏 a (糸)	R001	99	15.3	2.9	10.0	x?	—

S X 010 黒灰色土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (糸)	R002	100	8.4	0.8	7.2	○	○
	R003	101	9.0	1.0	7.2	○	—
	R005	102	9.6	1.5	8.0	○	○
	R004		10.1	1.5	6.8	x	x
小皿 a ₂ (糸)							
坏 a (糸)	R001	103	16.0	2.7	11.3	○	?

S X 010 緑灰色土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (糸)	R001	95	8.6	1.0	6.2	○	○
	R005	94	8.0	1.0	6.0	○	○
	R006	93	7.6	1.0	6.7	○	?
坏 a (糸)	R002	98	13.0	2.5	9.3	○	○
	R003	96	12.6	2.5	9.6	○	○
	R004	97	12.2	2.7	9.0	○	○

S X 015 黒灰色土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (糸)	R001	104	7.8	1.2	6.5	○	○
	R002		8.2	1.25	6.8	○	○
	R003	105	8.4	1.35	6.4	○	○
	R004		9.6	1.25	7.5	○	○
	R007	106	7.7	1.2	6.6	○	○
	a1		8.6	1.6	7.2	○	○
	a2		8.2	1.1	7.6	○	○
	a3		8.6	1.2	7.9	○	○
	a4		8.6	1.05	8.1	—	—
	a5		8.4	1.2	7.6	○	○
a6		8.6	1.2	6.7	○	—	
a7		8.6	1.1	7.4	○	○	
a8		8.2	1.3	7.0	○	—	
a9		7.8	1.1	6.6	○	?	
a10		8.6	1.0	7.7	○	—	
小皿 c	R005	108	8.0	1.85	5.45	○	○
	R006	107	7.6	1.85	5.25	○	?
坏 a (ヘラ)	R016		16.5	3.3	13.1	○	○
	R008	116	12.4	2.75	9.15	○	○
坏 a (糸)	R009	114	12.6	3.0	8.8	○	○
	R010	115	12.4	2.95	9.7	○	○
	R015	110	12.4	2.8	9.2	○	○
	R011	111	12.2	2.9	9.35	○	○
	R012	113	12.7	2.85	9.55	○	○

	R013	112	12.5	3.0	9.55	○	○
	R014	109	12.5	2.95	9.3	○	○
	a1		12.4	2.5	8.6	○	○
	a2		12.4	2.7	9.4	○	○
	a3		12.6	3.0	9.4	○	○
	a4		13.2	2.8	10.1	○	○
	a5		15.0	2.3	11.7	—	—
	a6		12.2	2.3	8.6	○	○
	a7		11.8	2.35	8.2	○	○
	a8		12.6	2.6	9.3	—	—
	a9		16.0	2.1	12.0	○	○

S X 017

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (糸)	R003	161	10.2	1.2	8.8	○	○
	a1		9.0	1.0	7.9	○	?
	a2		9.8	0.7	9.2	○	—
	a3		10.2	1.1	7.6	○	—
	a4		10.5?	1.2	7.4?	○	○
坏 a (糸)	R001		14.6?	2.2	10.0?	○	—
	R002	162	13.4?	2.4	8.0?	○	—
	a1		12.8	3.5	9.6	—	—

S X 019

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D	
小皿 a (ヘラ)	a3		9.8	1.2	7.0	○	○	
	a4		9.8	1.1	7.4	○	—	
小皿 a (糸)	R003	23	10.0	1.3	7.9	○	○	
	R004	22	9.9	1.0	8.1	○	○	
	R005	21	9.4	1.3	7.2	○	○	
	R006	25	9.0	1.1	7.9	○	○	
	R007	24	8.4	1.0	7.9	○	○	
	R008	20	9.0	1.2	8.0	○	○	
	R009	27	9.6	1.2	7.3	○	○	
	R010	26	9.2	1.0	6.4	○	○	
		a1		10.2	0.8	8.8	○	○
		a2		8.8	0.8	8.0	○	○
小皿 c (ヘラ)	c1				6.0	○	○	
坏 a (糸)	R001	28	15.4	3.0	11.0	○	○	
	R002	29	16.4	3.2	11.0	○	○	
	a1		16.8	2.5	12.4	○	○	

S X 020

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (ヘラ)	R001	163	9.5	1.15	7.6	○	○
	a1		9.0	1.1	7.0	○	x
	a2		9.2	1.15	7.4	○	○
	a3		10.0	1.1	7.6	○	○
	a4		9.4	1.2	7.2	○	○
	a5		9.6	1.25	7.8	○	x
	a6		9.2	1.3	7.3	○	○
	a7		9.0	1.1	6.6	○	○
小皿 a (糸)	R002	164	9.0	1.2	7.2	x	x
坏 a (ヘラ)	R003	165	15.8	3.05	11.9	○	○
	R004	166	16.4	3.1	11.6	○	○
丸底坏 a	R005	167	15.6	3.0	—	x	x
坏 c ?	c1				6.4	x	x
	c2				6.6	x	x

S X 020 黄灰色土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (ヘラ)	R002	183	9.4	1.2	7.1	○	○
	R003		9.0	1.3	7.4	○	○
	R004	185	9.2	1.25	6.7	○	○
	R005	180	8.9	1.4	7.1	○	○
	R006	182	8.7	1.35	6.8	○	○
	R007		8.9	1.25	6.7	○	○
	R008	184	9.2	1.3	6.5	○	○

	R010	188	9.5	1.05	6.96	○	○
	R011	189	9.5	1.1	7.05	○	○
	R012		9.5	1.0	8.15	○	○
	R013		9.8	1.03	8.1	○	○
	R027	181	9.8	1.45	7.35	○	○
	R031		9.4	1.3	7.8	○	○
	R032	187	8.8	1.5	6.4	○	○
	R033	186	9.4	1.25	7.7	○	○
	R034		9.4	1.4	7.7	○	×
	R035		9.1	1.25	7.3	○	○
	R096		8.8	1.3	6.75	○	×
	R037		9.1	1.25	7.3	○	○
	R038		10.5	1.6	7.7	○	○
	a 1		9.0	1.15	7.2	○	○
	a 2		9.8	1.2	8.2	○	○
	a 3		9.2	1.1	7.6	○	?
	a 4		9.6	1.0	7.8	○	○
	a 5		9.0	1.1	6.8	○	○
小皿 a (糸)	R009	190	9.1	1.0	7.5	○	○
環 a (ヘラ)	R014	196	15.6	3.35	11.05	○	○
	R015	197	15.8	3.3	12.0	○	○
	R016		16.0	2.85	11.2	○	?
	R017		15.8	3.3	11.95	○	○
	R018		15.9	2.9	11.8	○	○
	R026		16.2	3.06	11.55	○	○
	R039	198	15.0	3.75	10.95	○	○
	a 2		16.2	3.0	11.2	○	○
	a 3		15.9	3.0	11.8	○	○
環 a (糸)	R019		15.5	3.2	11.55	○	○
	R020	199	15.6	2.85	11.4	○	○
	R028	200	15.5	3.1	10.85	○	○
	a 1		16.8	2.9	12.0	○	○
丸底環 a	R021	195	16.3	2.9	-	×	○
	R022	191	16.9	2.8	-	×	○
	R023		16.6	3.3	-	×	○
	R024		16.1	3.05	-	×	○
	R025	193	15.8	3.2	-	×	○
	R029	192	16.4	3.55	-	×	○
	R030		16.0	3.25	-	×	○
	R040		16.2	3.3	-	×	○
	R041		16.4	2.95	-	-	○
	R048	194	16.0	3.0	-	-	○
	a 4		17.6	2.4	-	×	○
	a 5		15.6	3.3	-	×	○
三脚付鉢	R044	201	19.8	5.6	-	-	○
S X 020 灰色粘質土層							
鉢 様	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (ヘラ)	a 1		9.8	1.05	7.8	○	×
	a 2		9.2	1.1	6.9	○	×
	a 3		9.4	1.7	7.7	○	×
	a 4		9.6	1.3	7.4	○	×
	R001	173	9.2	1.6	7.5	○	○
	R002	172	9.4	1.1	7.5	○	○
	R003	171	9.6	1.4	7.35	○	○
	R004	174	9.7	1.25	8.2	○	×
	R005	169	9.4	1.2	7.05	○	○
	R006	170	9.4	1.6	8.0	○	×
環 a (ヘラ)	R007		16.2	2.8	11.85	○	×
	R008		15.7	3.25	11.25	○	×
	R014	179	16.2	3.3	11.75	○	○
	R015	178	16.2	3.1	12.1	○	○
丸底環 a	R009	177	15.5	3.1	12.4	×	×
	R010		16.4	3.3	-	×	○
	R011	175	16.4	3.8	-	×	○

	R012	176	17.4	3.8	-	×	○
	R013		15.3	2.7	11.45	×	○
丸底×環 a	a 1		15.0	2.5	-	?	○
S X 022							
鉢 様	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
徳柄 C	R001	30	15.6	5.4	6.75	-	-
S X 027							
鉢 様	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R001		8.8	1.1	6.8	○	○
S X 034							
鉢 様	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R001	32	9.9	1.1	8.0	○	?
	a 1		7.4	0.8	6.0	?	-
	a 2		7.6	0.8	6.6	?	○
	a 3		9.0	1.2	7.0	?	?
小皿 b (糸)	R003	33	7.7	1.4	5.7	○	?
小環 a (糸)	R002	34	9.0	1.7	5.2	?	?
環 a (糸)	R004	35	13.1	2.7	9.6	○	-
鉢	R005	37	45.5	10.5	31.4	-	-
S X 034 暗灰色土層							
鉢 様	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
環 a (糸)	R001	31	13.2	2.7	8.6	○	×
S X 034 黄灰色土層							
鉢 様	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	a 1		9.0	1.2	7.2	-	-
環 a (糸)	a 1		13.0	2.3	9.0	-	-
S X 037							
鉢 様	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R002	38	9.4	0.8	7.0	○	○
環 a (糸)	R001	39	15.0	2.5	10.0	○	-
S X 037 暗灰色土層							
鉢 様	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R003	40	8.0	1.0+a	7.2	○	-
環 a (糸)	R001	42	15.6	3.3	10.5	○	○
	R002	41	15.5	3.1	11.3	○	○
	a 1		16.4	3.3	11.4	○	○
S X 037 黒灰色土層							
鉢 様	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (糸)	R006	44	9.4	1.0	7.2	○	○
	R007	45	9.4	0.9	7.2	×	-
	a 1		9.6	1.0	8.6	○	○
環 a (糸)	R001	48	15.9	2.7	10.4	○	○
	R002		15.7	2.7	11.2	○	○
	R003	47	15.8	3.1	11.0	○	?
	R004	46	16.0	3.3	11.4	○	○
	R005	49	15.5	3.2	11.2	○	○
	a 1		16.6	2.5+	-	-	-
S X 038							
鉢 様	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
環 a (糸)	R001	50	15.8	2.9	10.8	○	○

遺構一覧表

(凡例)

- この表は基本的に現場調査時に作成したものである。
- 遺構番号は本文に使用したものと同じである。
- 地区は遺構の所属する任意の調査グリットの意で、グリット南東の記号に代表される。本文第10図参照。

S-番号	遺構番号	種別	切り合い	地区	時期
2	SX002	溝状	2→4	1ライン	古代末
3	SD003	溝状		2ライン	江戸後期
4		Pit 群	2→4	C1	
5	SK005	土坑		B3	中世
6		Pit 群		C2	
7		Pit 群		B1	
8	SK008	土坑	8→20	G2	江戸後期
9		土坑(電柱アンカー)		G2	現代
10	SX010	覆まり状		F4	古代末～中世
11	SK011	土坑		G3	*
12		Pit 群		G2	
13		Pit 群		F2	
14		Pit		G2	
15	SX015	覆まり状(SX010の一部か)		H4	中世
16		土坑		F3	現代
17	SX017	覆まり状		Bライン	中世
18		Pit		G2	*
19	SK019	土坑		F3	中世
20	SX020	覆まり状	20→15	2ライン	中世
21		Pit		G2	
22	SK022	Pit		C3	古代
23	SD023	溝		F2	現代
24		Pit 群		C3	古代末～中世
26		Pit		C4	近世～現代
27	SK027	土坑		H3	*
28		土坑		D3	*
29		土坑		D3	古代末
31		土坑(電柱アンカー)		E2	現代
32	SK032	土坑		E2	古代末
33		土坑		D3	*
34	SK034	土坑		E3	中世
36		土坑		D3	古代末
37	SK037	土坑		E3	中世
38	SK038	土坑		F3	*
39		土坑	39→15	H4	*
41		土坑	41→15	G3	*
42		土坑	10→42	G4	*
43		土坑		H2	近世～現代
44		Pit 群		H3	*
46	SK046	土坑		H4	近世
47		土坑		E4	古代
48		土坑		E3	
49		覆まり状		H3	近世～現代
51		土坑		H2	*
52	SB052	井戸(石井)		D2	近代

出土遺物一覽表

凡例

- ()中の数字は破片数を示す。
- N×VはVまたはV類の意。
- N～VはIV、V、VI、VII類のうちのどれかの意。
- 同一部体で別々の遺構から出土している場合はそのまま両方の遺構に点数をカウントしている。
- Obは黒曜石、Andは安山石、Fはフレークの意。
- 陶器分類は「大宰府発跡」日1983年太宰府市教育委員会の分類に基づく。

赤褐色土

須臾器	壺(2)	
土器部	坏a(赤)、小坏a(赤)、坏b(1)、壺	
黒色土器部	碗片	
青磁	甌	I(2)、I2×3(1)、I2-4(1)、I3(1)、I5(1)、I5b(3)
	碗	片(1)
	阿安	碗 III1b(1)、Ib(1)、I7(1)
	その他	高麗 碗片(康儀有り)(1)、近世7小壺(1)
金属製品	鉄棒(2)、鉄(2)、かんざし(1)	
土製品	分銅形	
白磁	碗	III(1)、V7(1)、V2(1)、V4c(1)、VIII(1)、VIII2?(1)、鉢II5(1)
	皿	V2?(1)、VI×VII(1)、VIIa(1)
		壺片(2)、他片(2)
青白磁	合子蓋(1)	
須臾土器	鉢片 東播? (2)	
陶器	無釉 鉢I2a(1)、片B'ab(3)、常滑壺? (1)、黄釉 虎(1) A'a(1)、A'b(1)	
瓦類	片、文字瓦「安楽寺」	
石製品	滑石片	
その他	陶文 銀片(1)	

表土

土器部	丸坏a、小坏a、近代?壺(1)、皿「野間」スタンプ有	
青磁	甌 碗 I1(1)、I2(1)、I2a(1)、I4b(1)、I5a(1)、I5b(1)、III2a(1)、片(5)	
金属製品	鉄棒(2)	
白磁	碗	IV(4)、IV1a(5)、V(1)、V4b(1)、VIII(1)、VIII2(1)、VIII2×3(1)
	皿	VIIb(1)、IX1a(1)
土師質土器	七輪(1)	
陶器	肥前磁器 皿(3)「泉惣」の器、阿波(1)ワラ灰胎 碗(1) 近世陶片	
瓦類	片、軒平(1)(無銘文あり)	
石製品	滑石製品(1)(穿孔有り)	
その他	ビー玉	

黒色土

土器部	坏a、丸坏a、小坏a、近代?燵火具	
青磁	甌	I1×III(1)、I2(1)、I2-4(1)
	阿安	碗 III(1)
土製品	把手	
白磁	碗	III(1)、IV(8)、IVb(1)、IV-VIII(2)、V7(1)、V2(1)、V2c(1)、V2b(1)、VIII(3)、VIII1? (4)、XI(タテヘツ)(1)、近代
	皿	III(1)、IV(1)、V(3)、V7?(1)
		壺I5a(1)
青白磁	碗(1)	
須臾土器	鉢	
陶器	唐津	阿志目皿(1)、筒前 酒坏(無銘文入り)素焼、灰胎 近世坏(内証銘の目無ハナ)
	肥前磁器	B類(1)、灰胎 壺A'b(2)、無釉 鉢I(1)、XI(1)、黄釉 壺B'ab(1)、近代陶磁片
石製品	滑石(3)	
その他	インク瓶「SIMCO」	

S-02

土器部	坏a(赤)、小坏a(赤)
青磁	甌 碗 I5b(1)

S-03

土器部	小坏a(ヘウ)
陶器	肥前陶器 丸柄(2)、柄(1)、精塗(1)、鉄胎 壺(2)、摺鉢(1)、燵火具(1)、土瓶(1)、鉛輪 土瓶(2)
瓦類	片、瓦片、平片(1)

S-04

土器部	坏a(赤)
瓦質土器	鉢片
瓦類	平片

S-05

須臾器	壺(4)	
土器部	坏a(赤)、小坏a(赤)、小坏a(赤)(やや口径大)、小坏c(1)	
青磁	甌	碗 I2
	阿安	碗 Ib(1)
	その他	高麗 碗III(1)、片(1)
白磁	碗	IV(2)、V2b(1)、VIII2×VIII3(1)、VIII2×V1
	皿	VI(5)、VIIa(1)、VII(1)、片(1)
須臾土器	鉢片 東播(1)、朝鮮?(1)	
陶器	高麗	陶皿(1)、青釉 鉢I(1)、水注X×鉢(1)、灰胎 朝鮮壺(1)、Ch.瀬(1)、青釉 常盤
	石製品	石ナベ片(1)、滑石片(1)

S-05 灰色土

須臾器	片(1)
土器部	坏a(赤)、ナベ?(1)
黒色土器部	碗片
金属製品	鉄釘(1)
白磁	碗 V3a(1)

S-06

土器部	小坏a(ヘウ)
黒色土器部	碗片

S-07

土 師 器	丸坏a(ヘラ),小皿a(ヘラ)
黒色土器B	鏡片
その他	縄文土器片

S-08

須 恵 器	変	
土 師 器	丸坏a,坏a,小皿a	
白 磁	鏡	II(3),III(1),IV(5),IV1a(1),IV2(1), IX(1),V×VIII(2),VIII(2),VIII2(1), VI1a(1)
	皿	片
瓦 質 土 器	火鉢A(1)	
須 恵 質 土 器	鉢 東播(1)	
陶 器	肥前磁器	粉A(2),粉B(1),缸皿(2),鉢(崎唐草)(1), 唐津 胡毛百軒(1),缸7(1),灰輪坏(1), 近世磁物 坏(2), 近世磁物 瓶(1), 近世磁物 箱鉢(1), 近世灰物 坏(1), 灰物 蓋IV1×2(1), 箱鉢 片(1),蓋7(1), 黄物 鉢B(1)
	瓦 類	平,丸,(数多い)軒平(1)

S-09

白 磁	鏡	IV(2),近代もの(1)
陶 器	款陶	酒坏(2),急須皿(1),陶織 各々

S-10

須 恵 器	変(2)	
土 師 器	小坏a(赤),坏a,皿c,小皿a(赤)(器書有り?),小皿b,小皿c	
青 磁	龍泉	鏡 I2(1),J5(2)
	皿	I(1)
	その他	鏡 片(1)
金属製品	鉄押(赤),鉄釘(3)	
白 磁	鏡	V3(1),V4×VIII(1),VIII2(2),IX(1)
	皿	片(2)
陶 器	箱鉢 鉢III(1),四耳壺III(1),Csb(四耳壺XII7)(1), 常滑(1)	
瓦 類	片	
石 製 品	滑石スタンプ(1),赤陶石?の硯	

S-10 磨灰土

土 師 器	丸坏a(ヘラ),坏a(赤),小皿a(赤),鉢(1)	
瓦 器	片	
青 磁	龍泉	鏡 I2×3(3) 小皿I5b(1)
	鏡	II(1),IV-VIII(5),VIII27(2)
白 磁	皿	IV(1),V×VI×VII(2)
	須 恵 質 土 器	朝鮮変?1),鉢 東播(1)
陶 器	鉢鉢 鉢I2a(1), 灰物 壺A×1),A(1)	
瓦 類	片	
石 製 品	And-サイドスレー F(1)	
その他	縄文 根製鉢(二枚貝ハケ有)(2)	

S-10 風灰土

土 師 器	坏a(赤),小皿a(赤),小皿a2(1)(混入?),小皿b	
青 磁	龍泉	鏡 IIb(1) 片(2)
	同安	皿 I(1)
	その他	高麗 鏡片(1),皿片(1)
白 磁	鏡	IV(2),V(1),V1(1),VIII(1),IX(1)
	皿	V1b(1),V2(1) 片(3)
瓦 質 土 器	火舎(巴文)(1)	
須 恵 質 土 器	鉢 東播	
陶 器	常滑 壺(2)(S-3 4 と同一か?) 無釉 鉢(1),坏(1),壺?2)	
瓦 類	片	

S-10 灰色土

土 師 器	坏a(赤),小皿a(赤),丸坏a(ヘラ)
瓦 器	鏡(1)
瓦 質 土 器	鉢?2)
陶 器	常滑 (2)

S-10 茶褐色

須 恵 器	変(2),朝鮮変?1)	
土 師 器	坏a(赤),小皿a(赤),小皿b	
青 磁	越州	鏡 II(1)
	龍泉	鏡 II(1),J5a(2),I5b(1),I2-4(2),III(1)
	皿	I(1)
	同安	皿 I(1),I2(1),片(1)
	その他	鏡 片(3),水注×壺(1)
金属製品	鉄釘(4)	
土 製 品	円形須恵質(1)硯?	
白 磁	鏡	IV(2),III×IV2(1),V2×VI 輪花(1), V1a(1),V2(2),V3a(1),V3×VIII3(1), 白V(2)
	皿	V2(1),VIII(1) 片(13)
青 白 磁	片(1),谷子(1)	
瓦 質 土 器	箱鉢(イブシカキ目有)(1)	
須 恵 質 土 器	鉢 東播(4),壺(格子叩き)(1)	
陶 器	無釉 鉢I2a(1), 天目 (1)	
瓦 類	片	

S-11

土 師 器	坏a(赤),小皿a(赤),
白 磁	鏡 VIII(1) 片(1)
土師質土器	近世 七輪片
須 恵 質 土 器	鉢(1)
瓦 類	片 近世

S-12

土 師 器	坏a(1),小皿a(1)
白 磁	鏡 VII1b(1)(器書「上」 or 「正」)

S-12 波灰土

土 師 器	坏a(赤),小皿a(赤),c片
瓦 器	鏡片

S-13

土 師 器	坏a(赤)片
白 磁	鏡 VI(1)
瓦 類	近世 片

S-14

土師器	片
瓦器	鏡片
青磁	片(1)
白磁	鏡 VII(1)
瓦類	片

S-15 黒灰土

須恵器	甕(1)
土師器	丸坏a,坏a(赤),小皿a(赤),小皿c,坏a(へ)
瓦器	皿
青磁	甕 甕 IIb(2),片(1) その他 高麗? (1),他 皿(1)
金属製品	釘(1),鉄塊(1)
白磁	鏡 IV(1),V(1),VI(1),VII(2),V-VIII(1), 皿 VIIb(1) 甕(1)
瓦質土器	鉢(1)
須恵質土器	鉢
陶器	無釉 鉢(1),坏(1),甕(2) 滑石 甕(2)
瓦類	片
石製品	滑石ナベ片(2)

S-16

土師器	坏a(赤),小皿a(赤),燈火具
金属製品	鉄棒(1)
陶器	無釉 甕(1), 高麗 甕(1)
瓦類	片(新しiv)

S-17

須恵器	甕(3)
土師器	坏a(赤),小皿a(赤)
瓦器	鏡片
青磁	甕 甕 14(2),15b(1) 片 阿安 甕 11b(1)
白磁	鏡 IV(1) 皿 IX(1),IX1(1) 甕 片(2)(未注?), 片(1)
瓦質土器	火舎(1)(巴文)
須恵質土器	鉢 東播(1)
陶器	無釉 甕IV(1), 鉄物 鉢I17(近世混入?), 甕片Cb(1), 滑石 (1)
瓦類	平片

S-18

土師器	坏a(赤),小皿a(赤),坏c
瓦器	鏡片
金属製品	鉄棒(1)
白磁	鏡 片(1)

S-19

須恵器	甕(1)
土師器	小皿a(赤),坏a(赤),坏c × 小皿c
青磁	甕 甕 I2(1),I2 × I3(1)
白磁	鏡 IV(2) 皿 VII(2) 片(2)
須恵質土器	鉢(1)
瓦類	平
その他	磁石(1)

S-19 黒灰土

土師器	片
瓦器	鏡片

S-20

須恵器	甕片(4)
土師器	丸坏a(へ),小皿a(へ),小皿a(赤),坏a,坏c
瓦器	鏡(1)
青磁	阿安 甕 片(1) その他 高麗(初唐) × 皿I
白磁	鏡 II(2),IIa(2),IV1a(2),IV(2),VI(1), V4b(1),XII1b(1),IVV(1),IV-VIII(5), 皿 II1a(1),III(1),VI(1),VIIa(2),II × III(1), V × VI(1),VI × VII(1),V × VI × VII(1), 甕 III(1),甕III(7)
青白磁	鏡(1),皿(1)
須恵質土器	鉢 東播(2)
陶器	無釉 甕(中国製)ab(1)
瓦類	文字瓦 平「安楽寺」(1)
石製品	滑石片,And-P(1) 近世の混入遺物複数あり

S-20 赤色土

土師器	坏a(へ),小皿a(へ),鉢7(1)(鏡文浅鉢7)
黒色土器B	片
白磁	鏡 VII2 × VIII(1) 皿 VIIb7(1)

S-20 灰緑土

須恵器	甕(1),朝鮮甕7(1)
土師器	丸坏a(へ),坏a(へ),小皿a(へ),坏a(赤),鉢(2)
黒色土器B	鏡片
白磁	鏡 II(3),IV(2),V7(1),V2(2),IV-VIII(1), V × VII(1),V × VIII(2),VIII(3), VIII × VIII 皿 III(1) 片(1)
須恵質土器	鉢 東播7(2),他(1)
陶器	青釉 E類甕(1)
瓦類	平片

S-20 黄灰土

須恵器	鉢(3)
土師器	丸坏a(へ),坏a(へ),坏a(赤),小皿a(赤),脚付鉢(2)
瓦器	片 鏡c(1)
青磁	甕 甕 片(1)
金属製品	片,鉄釘
土製品	ルツボ(1)
白磁	鏡 II(1),II1(1),II(3),IV(6),IV1a(2),V(2),V2(4), VIII(1),VIII(2),IV-VIII(12), V1 × 2(1),V2 × VII × VIII(1),片(1) 皿 III(1),VI(3),VIIa(2),VIIb(2),V2 × IV(1),V2b(1),X(1)
青白磁	片(2)
鉄物	皿7(1)(須恵質京橋)
陶器	天目 鏡(1)混入?, 短脚 鉢VI(1), 灰物? (1) 緑釉 皿(1)
青花	近世(1)混入
瓦類	平「安楽寺」(1)銅格子,平(1)小銅目
石製品	滑石器器片,And-P(1)
その他	ガラス小玉(1) 近世混入多少あり

S-21

瓦	類	片	近世
---	---	---	----

S-22

土師器	環a(赤)片,小皿a(赤)片
-----	----------------

瓦	器	駒(腹内)
---	---	-------

黒色土器B	片
-------	---

S-23

土師器	大葉片
-----	-----

青磁	龍泉	碗	III(1)
----	----	---	--------

			片
--	--	--	---

陶器	加軸	壺(1),肥前磁器	碗(1)
----	----	-----------	------

瓦	類	片
---	---	---

S-24

土師器	丸環a(へう),小皿a(へう),環a(赤),環c(赤)
-----	-----------------------------

陶器	貫軸	片(1)
----	----	------

S-26

土師器	駒片
-----	----

瓦	類	平(平安)
---	---	-------

S-27

土師器	環a(赤),小皿a(赤)
-----	--------------

瓦	器	駒片
---	---	----

白磁	碗	V(クシ)?(1),JV1a(1),IV(1),VIII(1)
----	---	---------------------------------

	皿	VIIIb(1)
--	---	----------

		片(2)
--	--	------

瓦質土器	鉢(1)
------	------

黒色土器	鉢	変型(1)
------	---	-------

陶器	編軸	即耳壺V(1)
----	----	---------

瓦	類	平片(近世)
---	---	--------

その他	磁碑(1)
-----	-------

S-28

土師器	丸環a片
-----	------

白磁	碗	V(1)
----	---	------

		片(1)
--	--	------

瓦	類	片(近世)
---	---	-------

S-29

土師器	丸環(1),小皿a(2)
-----	--------------

S-31

土師器	環片(中世)
-----	--------

瓦	器	片
---	---	---

陶器	近代輪付碗,近代陶磁
----	------------

瓦	類	片
---	---	---

S-32

須恵器	壺(1)
-----	------

土師器	環a(赤)(中世),小皿a
-----	---------------

青磁	龍泉	碗	15a(1)
----	----	---	--------

	皿	片?(1)
--	---	-------

金属製品	鉄滓(1)
------	-------

土製品	フイゴ(1)
-----	--------

白磁	碗	IV(2),JV1a(1),V(1),片(2)
----	---	-------------------------

	皿	VII(1)
--	---	--------

		水注II(1),壺?(1)
--	--	---------------

土師質土器	七輪(2)
-------	-------

陶器	肥前磁器	丸鉢(1),皿(1),鉢(1),鉢(2),壺?(2),薄鉢(1),唐津(瀬毛目)
----	------	--

		皿(3)(内底輪ハキ),行平?(1),
--	--	---------------------

石製品	磁石(1)
-----	-------

S-33

土師器	環a(へう),小皿a(へう)
-----	----------------

白磁	碗	II(2)
----	---	-------

S-34

須恵器	環蓋(1)
-----	-------

土師器	環a(赤),小皿a(赤),小環a?,小皿b?
-----	------------------------

青磁	龍泉	碗	15b(1)
----	----	---	--------

	阿安	碗	片(1)
--	----	---	------

		皿	II(1)
--	--	---	-------

白磁	碗	VIII(1),V1b×VIII(1),片(2)
----	---	--------------------------

緑釉	片(1)
----	------

土師質土器	火舎
-------	----

陶器	常滑	壺(1)(S-10と同一か?)
----	----	-----------------

S-34 焼灰土

土師器	環a(赤),小皿a(赤)
-----	--------------

青磁	龍泉	碗	II-4(1)
----	----	---	---------

白磁	碗	II(1)
----	---	-------

骨白磁	片(1)
-----	------

土師質土器	火舎(1)(S-34焼灰土と同一)
-------	-------------------

陶器	編軸	壺A'b(1),壺×鉢?B'ab
----	----	------------------

S-34 貴灰土

土師器	環a(赤),小皿a(赤)
-----	--------------

黒色土器B	片(1)
-------	------

青磁	龍泉	碗	片(1)
----	----	---	------

白磁	碗	IV2(1)
----	---	--------

土師質土器	火舎(1)(焼灰土に混合)
-------	---------------

陶器	常滑	壺(2),黄釉
----	----	---------

		壺(1)
--	--	------

S-36

須恵器	壺(1)
-----	------

土師器	丸環a(へう),環a(へう),小皿a(へう)
-----	------------------------

黒色土器B	小皿(1)
-------	-------

S-37

土師器	小皿a(赤),環a(赤),(へう少量混)
-----	----------------------

白磁	碗	片(2),IV(1),II7(1)
----	---	-------------------

		壺(1),片(1)
--	--	-----------

陶器	梅輪	壺(1),
----	----	-------

瓦	類	片
---	---	---

S-37 黒灰土

須恵器	壺(1)
-----	------

土師器	環a(赤),小皿a(赤),器合(1),ナベ片(1),
-----	----------------------------

瓦	器	駒(1)
---	---	------

青磁	龍泉	碗	13(1)
----	----	---	-------

白磁	碗	II(1),V4b(1),白IV(2),白VIII(1)
----	---	------------------------------

	皿	V1(1),VIIa(1)
--	---	---------------

		片(1)
--	--	------

須恵質土器	片(1)
-------	------

陶器	鉢IV
----	-----

瓦	類	平片(燻)
---	---	-------

S-37 淡灰土

土師器	環a(赤),小皿a(赤),ナベ(1)
-----	--------------------

白磁	碗	片(1)
----	---	------

		片(1)
--	--	------

陶器	鉢V(1)
----	-------

瓦	類	
---	---	--

S-38

土 師 器	环a(赤)
白 磁	皿 片(1)

S-39 黒色土

土 師 器	环a(赤),小皿a(赤)
-------	--------------

S-41

土 師 器	环a(赤)
土 製 品	黄土塊(スサ入り)(1)

S-42

土 師 器	环a(赤),小皿a(赤),小皿a(ヘラ)少ない,	
瓦 器	碗c片	
黒色土器A	碗片	
青 磁	甌 碗 皿(1)	
白 磁	碗	VIII(1),V4b(1)
	皿	VIIb(1)
		碗片(4)
黒色黄土器	鉢(2)	
陶 器	滑石 薬?(1), 磁 片(1)	

S-43

須 恵 器	甌
土 師 器	丸环a,小皿a,(ヘラは多いが埋入品)
青 磁	甌 皿 皿(1)
陶 器	磁 碗(1), 肥 田 碗(褐色透明釉)(1)

S-44

土 師 器	环a(赤),小皿a(赤),近代土師片
陶 器	近代陶 花瓶
瓦 器	片

S-46

土 師 器	环a(赤),小皿a(赤),环c	
青 磁	甌 碗 碗 皿-IV(1)	
白 磁	碗	V4b×VIIb
		碗III(1),片(1)
瓦 質土器	瓦片	
須 恵 土 師 器	甌 碗薬?(1)	
陶 器	滑石 薬(1), 近代陶,碗片,近世樂器片(1)	
石 製 品	滑石ナベ片	

S-47

土 師 器	环a(赤),小皿a
黒色土器B	碗片

S-48

須 恵 器	环?(1)	
土 師 器	小皿a片	
瓦 器	片	
白 磁	碗	片(1)
	皿	VI×VII(1)

S-49

土 師 器	环a(赤),小皿a(赤),(中世)
青 白 磁	皿(1)
陶 器	黄釉 碗B'
瓦 器	平片,丸片

S-51

土 師 器	小皿a(赤)(中世),环a	
青 磁	甌 碗 碗 III(1),皿(1),片(1)	
白 磁	碗	V(1),V3a(1)
		碗III(1),片(1)
陶 器	磁 碗 (即耳環XIII(1)(中世),A(1), 高 塚 水 ぎ し(1)(アメ類), 肥 田 磁 器 ソノチヨコ(1),E類(1),皿	
瓦 器	片	

S-52

陶 器	茶 碗, 湯 飲 茶 碗, 鉢, 平 鉢, 向 付, 太 皿, 小 皿, 公 事 皿(2), コーヒーカップ, 磁 碗, 磁 皿, 土 甌
紫 釉	七輪(2), ロウソク立(1), ままごと道具(2)
瓦	丸瓦
ガラス	コップ, 皿
金属製品	キセル(1)
その他	「サクラ」ビール瓶

大宰府の土器型式と年代

(森田・横田)	①大 森田 横田 1978	②南 前川 1980	③ 森田 1983 大宰府	④森田・横田 型式の移動に 係る年代の動 く可能性	⑤森 山本 1986 北九州
	(98SX2480)		A		I A B
大85SD2340 734「天平6」	700 (85-87-90 SD2340)		B	1 2	II
	725				III
	750 45SK1280-1285 43SE1081				IV
	825 18SE400		C		V
	850 70SK1800	I	A		VI
			B		VII
大74SD205A 927「延長9」	900 35SK678		A		VIII
	927 34SK674		B		IX
	950 65-2SE1558	2	C		X
	1000 43SE1083		A		XI
	1050 38SK802		B		XII A B
平安京左京4条 1坊SE3 1091「寛治5」	1100 46SD1930	3	C		XIII
			D		XIV
	1150 45SK1204	4			XV
			1		XVI
大33SD605 1224「貞応3」	1200 43SK1085	2			XVII
	1225 33SK 38SK835	3			XVIII
	1250 601	4			XIX
大109, 111SD3200 1304「嘉元2」 大45SX1200 1330「元徳2」	1300 38SK830	5 A			XX
	1350 45SX1200 新 (33SK624)	5 B			XXI
		6			
大70SD1805 1501「文龜元年」	1500 70SD1805				

①大宰府史跡関係

②南条坊関係

③森川船「大宰府の出土品」④土器、陶磁器、

「仏教美術」1983

()は後日追加された様式遺構

()は②で前川氏が比定した遺構

*①大74SD205AはⅧとⅨを含む

*②大33SD605はⅩⅦとⅩⅧを含む

*③大45SX1200はⅩⅨとⅩⅩを含む

*④大85SD2340はⅡとⅢを含む。Ⅲは少ない

4. 小結

遺構

調査区の設定が狭い面積に留まったため、性格不明の遺構になってしまったものが有り、大局的な概説はできない。今回報告した大町遺跡で検出された遺構は生活に関連したもので、時期的には平安時代後半の11世紀後半から12世紀、鎌倉時代後半の13世紀後半から14世紀前半、江戸時代後半の18世紀後半の3時期にピークがある。このピークは1章で解説した周辺遺跡の動向に合致している。すなわち条坊制の本格施工と安楽寺の増大化、南北朝時の中世都市太宰府の再編、「宰府まいり」の流行に伴う宿駅街としての発展などがそれぞれのピークの背景にあったと思われる。

遺物

(1) 中世土器について

今回の調査で出土した土師器、特に小皿a、坏a、丸底坏aは時期的にはXII期からXV期(11世紀後半から14世紀中頃)に相当するものと考えられるが、製作手法上の特徴から、以下の様に大きく三つの時期にまとめてみる。SX020に代表されるXII・XIII期(A期とする)、SK005、SK019に代表されるXIV・XV期(B期とする)、SX010に代表されるXVIからXVII期(C期とする)である。

以下、個条書きでそれぞれの特徴を述べる。

A期

小皿a、坏aともに、体部はほぼまっすぐ外上方に開き、口縁端部を丸く収めるものがほとんどである。

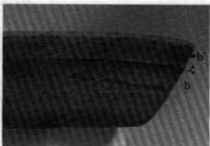
坏aには底部が膨らみ、丸底坏aの形態に近いものがやや多い。ただしこの坏aには内面にミガキb、外



1 ナデa



2 ナデb



3 ナデb'



4 ネジリ様痕跡

面に指頭圧痕はない。

坏a、丸底坏aの中には体部外面にナデaの痕跡が認められるものがある。

B期

器形上はA期と比べるとほとんど変化はないが、小皿aの中に口径11.0～12.0cmの大型品が少量ある。

坏aの中には体部外面にナデaの痕跡を残すものがある。

C期

小皿aは体部が直立気味で、口縁端部がつまんだ様に尖ったものが多い。坏aについてもA・B期のものと比べると、体部が直立気味である。

体部外面にはナデaの痕跡が残るものはほとんどない。

坏aの体部外面最下位にネジリ様の痕跡が残るものが比較的目立つ。以上の点から若干の考察を加えてみる。

三つの時期の特徴をみると、B期とC期の間に器形上、調整上の違いがあることに気付く。まず、ナデaの痕跡を持つ坏aについて見ると、A・B期ではその数が坏aの全体数の中で半数近くの割合を占めていたものが、C期に入るとその痕跡を残すものは皆無となっている。このナデaの痕跡が認められる土師器は、いずれもナデaの上からナデbを加えており（この時、ナデbを体部最下位から加えるものと中位から加えるものがある）、「成形—ナデa—ナデb—底部切り離し」という製作工程順となっている。これは、C期に入ると「(成形—)ナデb—底部切り離し」(註1)という、一工程簡略化された製作工程へと変化している。つまり製作工程上へラ状工具によって器面調整をする段階から、ロクロナデ調整だけで製品化する段階への変換がB期とC期の間、つまり13世紀中頃から14世期にあったと推察される。

次に、C期に見られるネジリ様の痕跡について見ると、ロクロの回転方向が判断可能な資料に限っては、ネジリの方向がすべてロクロの回転方向に一致している。このことから、この痕跡は粘土紐積み上げによってできた粗形から、回転を利用して形を作り上げる際にできた「引き上げ」の痕跡と思われる。(註2)さらにこれらの資料では、この痕跡を消そうと、体部上半にナデbによる再調整を加えている。この製作工程を推定すると「粘土紐積み上げによる素形作り—ナデbによる器面調整—底部切り離し」となる。ネジリ様の痕跡が認められるのは、ナデaを行わずにナデbのみによる再調整の結果、引き上げの痕跡が十分消えなかったのであろう。器形的にもこの時期を境に変化が見られ、製作手法とあわせて製作技術の変化を推察できる。

これら製作技術上の簡略化は、巻き上げ成形—ロクロ水引き成形への移行現象を示す可能性を持つ。これらの問題解決には、製作技術と器面に残る調整痕との相関性について、実験による検証が必要である。また、こうした特徴は他の遺跡出土の土師器にも、普遍化できるか否か

検証を要す。今回は当遺跡で押えられた土師器の特徴（調整痕の時間的相異）と、製作技術の変化が各地で援用しうるかを今後の課題としておきたい。（註3）

註1 ここで成形に（ ）を付けているのは、C期に残るナデbの痕跡が、ロクロ水引き成形の結果、あるいはロクロナデ調整の結果ついたものか、現段階では不明確なためである。C期出土の坏a、小皿aともすべてに内底のナデ調整が施されており、すべてが水引き成形のみによるものとは考え難い。

2 ネジリ様の痕跡の生成原因については観察者間でも異論がある。

3 今回完形品の個体数が充分でないため詳しく検討できなかったが、前述のC期の坏の中でSX010の坏に、数点ロ線部までナデbが連続していると思われるものが確認され（第22図151・152・156・158）、これがロ線部の再調整を省略、或いは省略を可能にした条件ができた結果なのかは、今後の課題である。

（2）近世土器について

大町遺跡1SK008、1SK032と1SD003から出土した遺物群は、同一規格の瓦など共通遺物を含み、近しい時期に位置づけできるものである。肥前系の磁器には鉢の文様に「繪唐草」が見られ、碗は「端反り」や「広東碗」を含まず、18世紀後半の時期が想定できる。陶器の構成は硬質のものに碗、坏、茶瓶、鉢、摺鉢があり、軟質のものには燈火具に関連する壺、油指しなどがある。これら陶器の他に瓦質土器を含む素焼系統の深鉢、七輪などがある。これらの遺物群と近しい土器群が福岡市藤崎A遺跡第19次調査SK01（註1）で出土しているが、こちらは量も器種も多いが、陶器、素焼系土器の構成は似通っている。また、博多遺跡第30次SK19は19世紀前半から中頃（いわゆる幕末期）の遺物群を持つと報告されているが（註2）、器種の構成の概様はあまり変化していないようである。

江戸時代後半期の博多周辺の生活跡での土器相は、他国産（主に肥前産）の磁器と自国産主体の硬質陶器、軟質陶器（生地が素焼質で鉛などの低火度溶融性の釉がかかるもの）と素焼系（瓦質を含む）土器で構成される。硬軟質陶器の意匠は、京都や大阪といった「上方」で出土する同時期の物と近似もしくは同一のものが多く、過去、博多などで出土したものが関西系遺物として報告されていたが、近年の小石原焼での当該期の窯の調査や（註3）、文献の再検討によって福岡藩主導のもとでこれら製品が自国で生産されていたことがわかってきた。（註4）この現象はこの時期に書かれた「広益国産考」（1844年）巻6の「先づ我住める國に出来ずして、他国より買入その代金を出す事をふせぐやうするを第一とし、我國に多く産じて、他国より金銀を取り入れるやうにする事ならんか。」の言に見られるところに指向性の原点があり、江戸後半期に起きた都市部を中心とした凡日本の陶磁器多量消費の流行に対し、筑前では藩主導の下に既存の生産地でのこれと新たな窯場を起すことによって、磁器では肥前物の、

陶器では信楽焼などの上方新商品のコピーを生産し、これに答えようとした。この様な動向は民間にも見られ、特に素焼人形、現在に続く博多人形の生産開始も初期段階では京都伏見産のもののコピーに始まる。(註5) 隣国筑後の久留米藩でも慶応元年に現在の久留米市東中野の東野亭にて陶器製造をおこない山水土瓶や行平を生産している。(註6)

陶磁器にしろ瓦にしろ、近世のこの時期に各地方の中小規模窯業によって作りだされた製品の凡日本的な意匠の均一性は、貨幣経済の急速展と港湾、海路の整備による回船業者間の量、スピード競争による一商品に対する市場の急速拡大、その結果起こる商品の絶対量の不足や消費側の生活様式の強い「江戸・上方」指向によって現れたもので、独立採算性をとらざるを得なかった幕藩体制下での、各藩でおこなわれた陶器生産をはじめとする殖産興業には、地方事情や採算を無視した投資事業的な性格が強く、維新後に継続しなかったものも多い。大正、昭和初期に起こった柳宗悦を中心とする民芸運動で取り上げられた「民陶」の多くも、こうした時代に出現し明治期に急速に変容、衰退していた大衆向けの陶器生産地であった。(註7)

註

- 1 「藤崎遺跡7」1991年 福岡市教育委員会
- 2 「博多9」1987年 福岡市教育委員会
- 3 「中野上の原古窯跡」1988 小石原村教育委員会
- 4 本誌「筑前野間焼について」参照
- 5 「博多出土の素焼人形 近世末の博多に於ける一手工業種の研究1」1988年 (『九州考古学』第62号) 山村信榮
- 6 「筑後陶変考」1978年 鶴久二郎
「田中幸夫寄贈品目録」1982年 九州歴史資料館
- 7 「現在の日本民窯」1937年 柳宗悦 編ほか

筑前野間焼について

筑前野間焼は福岡県福岡市南区嵐山2丁目にあり、現在では岡本光山氏経営の岡本窯1軒が操業を続けている。ここでは採集された野間焼の紹介を含め江戸時代後半期に起きた一手工業としての歴史的推移に触れてみたい。(註1)

文献資料

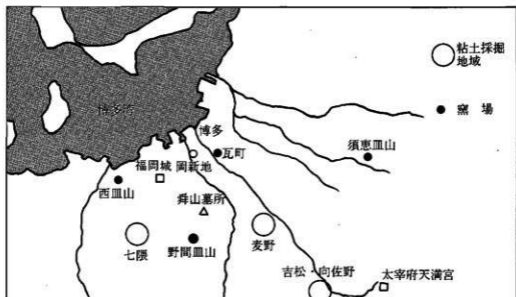
(1)「福岡藩民政誌略」高取焼及西皿山焼、博多素焼物の起源(註2)

「瓦町焼は瓦缶の類にて、神前に献る土まりを始め、雅人の用うる風爐、連甕及び日用の火爐糞缶等なり。中にもヒナリンと称するは、聖福寺子院虚白院の智首座が思得しより、始めて製せしものなり。今は戸毎に日々煮爰の用とする。他邦にも発売する事少なからず、此瓦缸の起源をしるせし書を見ざれども、瓦工の播磨より黒田氏に従い来し者を、博多の南辺に居らしめ、慶長六年築城の日、瓦を作らしめられしより、その居所を瓦町と名づく。その製瓦より他器をも発明せしと聞こえて、宗七と称せし良工も、播磨より来りし瓦工にて、正木氏なり。今は瓦町に隣れる祇園町、上新川端町にも、同製の瓦缸を成す。よりておもへば、二百年前後に起こりしならん。白焼と称するは、瓦町の(ママ)と称する者、文政、天保の頃、野間、高宮の白土を以て、始めて製す。又同地にて製する土偶人は文政の頃、肥後熊吉というもの来たりて、著色までも教えしに起こる。

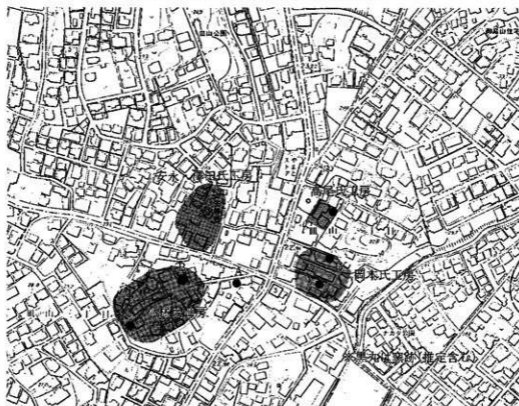
小石原焼と称するは、(ママ)人天和中上座郡小石原村の支邑中野に來り、肥前の瓷器に倣ひて製造す。故に中野焼共称す。貞享中は皿山奉行を設て、藩用とし、頗る盛なりしに、享保の末より、改めて水瓶、酒徳利等を製す。工なれども辦達の運送便ならざる地なれば、其近村の民に便りするのみ。寛政年は陶工八戸、窯3区ありしと聞ゆ。

西皿山焼は享保三年小石原に居し陶工数人を、早良郡鹿原村に移らしめられる。元の如く民用の播盆、水缶、非垣、夜壺の類を製す。寛政中は陶人二十七戸、窯を三処に設けたり。藩より陶戸に本銭を貸して、その成せし器を収む。奉行を置きて、その事業を掌しめ、士庶の乞う者には、廉価を以てうりいだしむ。有司その利至微なるを以て、廃せんと議せしかども、日用調べからざる器なるに、国製なくば他邦の高価なるを求めずば叶ふべからずして、諸人の憂とならんとて、その言を用いずして、今に至れり。(中略)

野間焼は那珂郡野間村の字柳河内にて製する日用下品の茶瓶等也。文政中国産会所を置かれし時、博多瓦町に陶窯を築き、須恵村の陶人を招き、野間の土を採り、竟品の瓷器を製せしめられ共、幾程もなく廃しければ、国主の命にて、安政三年六月より、別に柳河内にて製することなれり。」



第26図 江戸～明治の筑前窯業関連跡位置図



第27図 福岡市野間焼工場、窯位置図(1/4,000)

(2)「福岡市史」第1巻明治編 第四編産業第二章工業(註3)

「物名 陶器(土瓶、茶碗、ユキヒラ、井鉢、瓶、摺盆、井樋、植木鉢、素焼類は七輪、火鉢、火掻、炮轆等なり。)

産地名 那珂郡博多上新川端町、瓦町、社家町、下祇園町、同郡野間村の内梅河内、早原郡龜原村の内西皿山、粕屋郡須恵村等にて焼出す。

産額数量 明治十一年の産額は博多素焼七輪、火鉢、火掻、土瓶、炮轆の類七万八千七百七十個、その価二千八百三十三円五十六銭とす。野間焼は土瓶、ユキヒラ、茶碗の類四万四千個にしてその価一千二百十円なり。須恵焼は土瓶、茶碗、井鉢の類十八万個、その価二千四百円なり。西皿山は瓶、摺盆、井樋、植木鉢の類二万五千個にして、その価二千円なり。総数三十二万七千七百七十個にして、総価額金八千四百四十三円五十六銭なり。

性質功用 博多の素焼七輪、火鉢、土瓶、西皿山の瓶、摺鉢等は粗品なりと雖も、人家日用のものにてその需要頗る多し。野間焼は京焼に擬せしものなり。

産地面積広 陶器製那珂郡博多十七戸、窯所一所に付凡そ十坪、同郡梅河内三戸、窯所二所共に横三間縦八十五間、粕屋郡須恵村窯所三百九十坪、早良郡西皿山窯所三所、内一所は九畝五歩、一所は一反二十七歩、一所は六畝歩なり。

自国消費 野間焼、須恵焼は悉く自国消費とす。博多の陶器生産額の二部、西皿山焼産額の八分は自国消費と見做す可きなり。

内国輸出 博多の陶器は大阪、馬関、越前、越中、越後、阿波、安芸、長門、豊前、豊後、筑後、肥前、長崎、唐津、肥後、老岐、対馬等の諸国へ輸出す。その数は産額の八分と見做す可きなり。早良郡西皿山の陶器は馬関、肥前長崎等へ輸出す。その数は産額の二分とす。概して八分と見做すときはその価額六千七百五十円余なり。

外国輸出 なし。

費用資金標準 費用資金区々なるを以て詳かにせず。

事業者当標準 事業者当同右

沿革状況 早良郡西皿山は享保三年旧藩主の命にて設置す。明治の頃稍や衰微に及びしをまた、藩命を以て興起し、爾後格別盛大に到らざれども、連続して現今も猶焼出す。粕屋郡須恵焼は宝暦年中設置逐年繁盛せしが、その後稍や衰微すれども現今の景況尚依然たり。又博多瓦町、祇園町は近世陶器製数戸となり、即今の景況最も隆盛なりとす。那珂郡野間焼は安政三年是又旧藩主の命にて興起するなり。現今の景況資金に乏しくして盛なるに至らず。野間焼の如き京焼に類して需要広し。蓋し資金を入れて拡張せば、将来盛大に至るべきと想像するなり。

(3)「市産業研究所」(昭和4(1929)年3月27日 福岡日々新聞の記事)(註4)

「堅胎にあって、本市の持産品である高取焼、野間焼および博多人形を始め、各種窯業の改善発達を図る目的を以て、昭和四年三月設立を見た。同所は窯業に関し各種原料の品質試験、

輸出向硬質人形の製作試験およびタイル製作試験等を行う外、諸種の講習会又は講話会を催し、これら特産品の品質向上のため、不断の研究を続け、指導奨励に努めた。(中略)近時欧米諸国に新販路を求めている博多人形を始め、駆壳茶瓶を一手に製造する野間皿山焼並びに封建時代より有名なる高取焼をそれぞれ改善発達せしめて、現在の生産額総計約六十万円を更に大いに増加すべく、福岡市は市立窯業研究所を市内中の島に建設し、昨二十六日午後一時前記三種の生産団体肝入りで、火入式を兼ね研究所落成式を挙行し、市長、産業課長、市参事会員等列席した。

因に同研究所昭和四年度経費予算は九千八百八十八円である。」

(4) 「野間焼」(註5)

「那珂郡野間村の陶器は、安政三年、藩庁より京都の陶工佐々木與三を招きて、陶業を起こすに創まる。明治十二年、與三の帰京に際し、同村澤田舜山が其工場を購ひ、日用雑器を製して、今に継続す。原土を同村柳河内に取り、釉薬は天草深江、其他五島のもの、及び本村近傍多尾村(註6)の地より買取すといふ。(明治十八年の調査による。)

(イ) なほ参照するに、野間焼は安政三年六月、当藩主の命により、佐々木與三、横田與七の兩人が那珂郡野間村の字柳河内に於て創製せり。京焼の類にして、土瓶、急須、茶碗等を製出す。近年來、其需要頗る多しという。

(ロ) 当窯は、安政四年、黒田家の御用にて開きしが、廃藩の際に止めり。かくて其時、従事せる京工佐々木與七の兩人にて、之を継続したり。澤田舜山も栗田陶工にて、先に当国須恵村の製磁業のため、当藩主に招かれしが、廃藩後は須恵焼を自營せり。然るに明治十年、右佐々木與三兵衛の帰京に際し、其跡を引受て之に入れたり。(年代及び人名に小差を見るも、姑く略す。)

(5) 「行平」(註7)

「窯は福岡県筑前国高宮野間皿山。福岡や博多の裏通りの唐津屋によると、きっとこの行平を標の上に見いだすであろう。今も盛んに作る。販路はもとより北九州一帯で熊本あたりでも見かける。この窯のことは本文に記載するのを洩らしたから、ここで短く語らう。福岡市内だが謂は郊外である。静かな陶郷で、仕事は三箇所に分れる。山の麓の一軒が石炭窯で汽車土瓶を焼くが、奥の二軒が行平だとか土瓶だとかの雑器を焼く。土瓶は二種類あって、一つは明らかに信楽系統の山水絵の土瓶で、一つは、「いっちゃん揃き」である。郷土色の濃い雑器である。ここに掲げた「行平」は後者の手法で、蓋にも胴にも横に黒の線を入れ、縦に白のいっちゃんを引く。もともと行平は土鍋であるが、この野間の皿山のものは最も特色あるものとして省みられていい。把手の作り工合も他では見かけない。寸法丈四寸八分、胴布五寸。ごく小型のもの作る。」

(6) 澤田舜山墓碑銘文(註8)

「翁姓澤田称舜山若州野多江之人也及成童就京師水刺家中村某陶工安田某極兩道之蘊奧有出藍之譽矣會錦島公求水刺家中村師鷹翁在七年有大功又應」（以上左面）

「其末家氏之聘博其兩道先是以有黒田公之聘來於筑前則全兩公之意黒田公以五口米給翁辭而不受焉如肥前伊勢屋丁筑前須惠陶場係翁之創業云後往野間垂休尤於兩道實可謂偉也矣是以薄賞不可勝數明治二十七年九月三十日卒年七十七諡秋月院」（以上裏面）

「釋善教居士銘曰 道傳肥筑 軸窯是全 善哉称舜 功垂萬年 浦田重道撰并言」（以上右側面）

(7)「野間焼 のまやき」(註9)

福岡市南区皿山の焼き物。1856年(安政3)福岡藩が京都の陶工佐々木与三、横田与七を招き、那珂郡野間村の字柳河内に製陶させたのがはじまりといわれ、製品は京焼の類で土瓶、急須茶碗などを産したという。別説には1861年(文久元)須惠皿山役所の管理のもとに野間の人安永与十を棟梁として八幡境内の山ろくに開窯したといわれ、製品は須惠焼と同様の磁器を産したという。ようやく発展しかけたころ、維新の変革にあい、1870年(明治3)廃窯となった。1860年(万延元)京都から須惠にきて製陶に従し名工といわれた沢田舜山は1875年(明治8)野間に移住し野間焼の復興につとめ精良品を産した。しかし努力も空しく廃窯のやむなきに至り、そこで陶器窯に改めて京都の門人小川平七郎に行平、茶瓶、土鍋、土釜、植木鉢などを製作させてその継統を図った。太平洋戦争直後まで数軒あった皿山も現在は岡本光山の一軒をのこすだけである。

(8)「従二位黒田長溥公伝」(註10)

「公は追々藩士を長崎に派遣し、蘭人に就て、諸種の工事製造等の術を伝習せしめ、弘化年間博多中島に精練所を設置し、反射炉を設けて、磁物の試験、及び硝子製造、青貝塗、綿布、染粉等の工業を 始し、又た京都より陶器師を招き、須惠、野間に於て陶器を製造せしめられしに、肥前の伊万里焼にも遜せぬ良品を製出せり。」

(9)「福岡県地理全誌」野間村(註11)

「野間村 (中略) 皿山。七戸。安政年中ヨリ此所ニテ瓷器ヲ製ス。故ニ名ク。佐々木與三ナル者良工ナリ。土ハ当村ノ内柳河内ヨリ出ツ。今窯二所ニアリ。(中略) 戸数六十二戸(中略) 職分 工男五人、女六人(中略) 物産(中略) 土瓶壺万式千八百 佐々木與三 横田與七製 此代金三百貳拾円」

註1、「博多出土の素焼人形 近世末の博多に於ける一手工業種の研究1」1988年(九州考古学第62号)にて同様の試みを博多人形についてもおこなっている。

2、「福岡藩民政誌略」明治20(1887)年長野誠(「福岡県史資料」第1号に収容)

3、「福岡市史」第3巻明治編 昭和34(1959)年 福岡市役所

- 4、「福岡市史」第4巻昭和前編（下）昭和41（1966）年 福岡市役所に収容
- 5、「日本近世産業史」1921年（「日本産業史総説」1991年柏書房 第5巻 収容）
- 6、長尾村の誤りか。
- 7、「現在の日本民衆」昭和十七（1932）年 柳 宗悦編 昭和書房
- 8、福岡市南区野間二丁目13番地の集団墓地の中にある。1992年2月山村調。岡本光山氏によると同業者によって建てられたもので、顕彰碑的性格のあるものという。
- 9、「福岡県百科辞典」1982年 西日本新聞社
- 10、「従二位黒田溥公伝（上）」明治29年 江島茂逸（「黒田家譜」第6巻上 1983年文献出版に収容）
- 11、「福岡県地理全誌」巻119那珂郡之6 明治15年

考古資料

現在、野間皿山で窯業関連の遺物が散布しているのは皿山2丁目と3丁目にまたがる4つの地点、第27図中のA、B、C、Dで確認され、中でもAとB、Cには窯体の残骸が見られ、Dは現在も採業中である。

(1) A地点の遺物 (第33図1・2)

A地点は皿山3丁目1番地にあり現在駐車場として利用されている。後述のB地点のある丘の裾部にある。

遺物はレンガ様の窯体の残骸に混じって行平の把手、灯明皿、電力用高压碇子が見られるが、概して破片が小さい。碇子には企業ロゴらしい変形のマーク、「JAPAN」、「250V」など青色でプリントされている。この碇子がここで生産されたものか否かは不明。

(2) B地点の遺物 (第28図、第29図、第32図1・2、第34図1・2・3)

B地点はA地点より南西に30メートルほどいった丘の中腹あたりで北側に小さな祠がある。1991年夏頃から家屋の建て替えに伴って多くの遺物が出土している。聞き取り調査によると戦後しばらくここで小林姓の窯元があったという。

遺物の種類は把手の型(1、2)、燈火具(4、5)、染め付け磁器の小皿(6)、陶器の壺(8、9、10)、行平(11)、把手、窯道具のサヤ(12)、用途不明のもの(13)などがある。第28図3の把手は太宰府市水城跡第18次調査で出土したもので「小林製」の浮き彫りがあり、参考品として掲げた。

把手の型は素焼製で、2枚合わせのもので、この型から打ち出される把手の長さは6.5cmほど(焼成後は1-2割小さくなると思われる)。一つには「豆」の字が浮き彫りされる。把手の先端部が開いており、芯棒を入れたものか型抜きの際の型を当てるための隙間であろうと思われる。製品の先端も穴が開いているものが多い。

燈火具はワイングラス型で硬質陶器(第28図4)と素焼状態(第28図5、第34図1・2)の二者がある。後者は未製品か。

染め付け磁器の小皿は、山水風の図柄を持ち3箇所以上にハリの目跡がある。搬入品か現地産かは不明。

壺の類はつまみが乳頭状、環状、付け紐状の3タイプが見られる。茶瓶(第28図7・9、うち7は素焼のまま)と行平(8・10)の2種に分けられるのであろう。釉は全体に薄く青味がかかった透明釉が、縞、斑点状に茶色味を帯びた黒色の薬が施され、その上から放射状に白色土を用いた「イッチン描き」が施されている。

行平も装飾については壺と同じで、口縁端部の内側だけ釉があき取られている。胴部内側にはロクロ目が残ったままである。復元口径は14.3cm。伝世品を見ると口縁下に穴を穿ち注ぎ口

が取付き、口と90度の位置に把手が取り付く。底はゆるやかな平底で軸はかからない。

窯道具には大型のサヤ（第29図12）と小型の円環状のもの（第34図3）、用途不明の延べ板状のもの（第29図13）があり、大型のサヤは複数出土している。このサヤは精円の箱型で長さ30cm、幅18cm、高さ15cmほどの法量を持ち、口縁に2箇所で半円形の割り込みを施す。体部外面に口の字のヘラ掻きが入る。胎土はごく目の荒い土が用いられる。

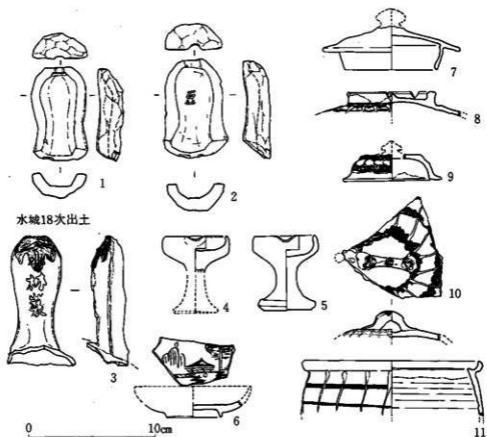
(3) C地点の遺物

C地点は皿山3丁目2番地、B地点のさらに南西の丘の反対斜面側にあり（第27・35図）、現在もレンガで組まれた窯体の一部が残っている。

出土遺物は細片ばかりで図化していないが、素焼製品がほとんどで人形も含まれている。

(4) 西花畑公民館収蔵品（第35図）

皿山1丁目山王神社の境内にある公民館には主に、岡本家で製作された大正期以降の製品が収蔵されている。解説には伊賀土瓶（2種）、鉄道茶瓶（大正2年以降）、ミニチアままごと用台所道具、白焼（土師器）のお神酒指しなどがある。中でも鉄道茶瓶は徳利形を呈すもので、



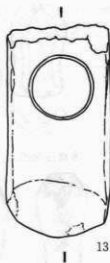
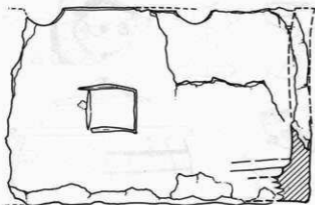
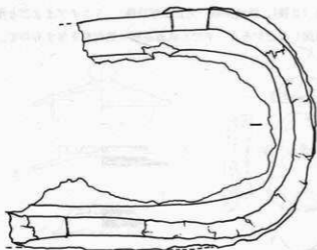
第28図 福岡市野間皿山B地点出土遺物実測図(1/3)



12



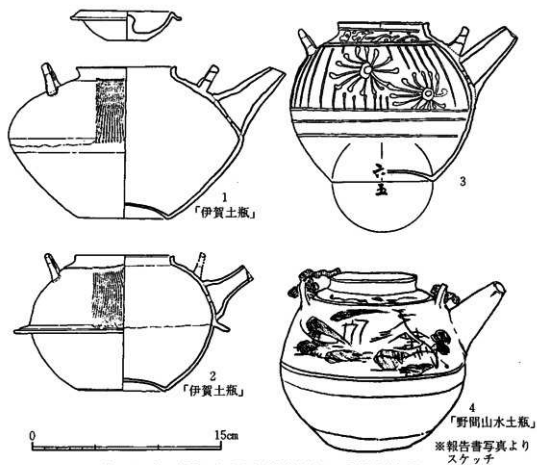
13



12

13

第29図 福岡市野間皿山B地点窯道具実測図(1/3)



第30図 春日市門田遺跡近世近代墓地出土の野間焼土瓶類

同種のものの中でも古期のものであろう。

(5) 春日市門田遺跡集團墓出土遺物 (第30図)

山陽新幹線の車両基地建設に伴って福岡県教育委員会によって調査された明治期の墳墓を含む「近世墓」地で、出土した野間焼製品と思われる物は7個体、4種類の土瓶である。これらは後産埋納容器として埋められたと解釈されている。

第30図1は算盤玉形の胴部の上半に跳びカンナが入る「伊賀土瓶」と呼ばれている土瓶、2は胴部中央にツバが付くもの、3は「イッチン描き」の圏線と花文様を入れるもの。4は黒、茶、緑で船、小屋、松などを描く「野間山水」と呼ばれる土瓶である。

いずれも遺跡の状況から明治時代のものである可能性が高い。

「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」第9集 1978年 福岡県教育委員会に収容。

資料の総括

野間焼の草創については文献資料の中で異同が見られ、当地野間で操業する以前に文政もし

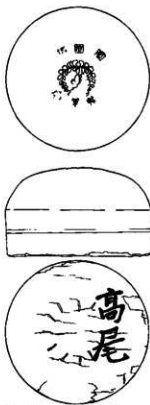
くは弘化年中に、福岡藩が博多中嶋町（岡新地）に設置した国産会所（精練所）と共に新たに博多瓦町に陶窯を築き、須恵焼の工人を招請して、野間の土を用いて肥前写しの上手物の磁器を生産した（文献1. 8）。その後の安政3年に野間に窯を移し、京都の陶工佐々木興三、横田與七が藩によって招請され、京焼に似た土瓶、急須、茶碗などの日用雑器を主体的に生産した（文献1. 4. 7）とする説。まったくの別説として文久元年に須恵里山役所管理の元、地元の安永与十が文久元年に磁器を生産したことが挙げられる（文献9）。ともかく野間焼の創業は福岡藩が幕末におこなった殖産興業政策に基づくもので、磁気を生産していた須恵焼を母体とし、一方で京の陶工を招請することで京焼の陶器生産技術（生産そのもの）を移入した。幕末の博多での京焼の土瓶、行平などの陶器の需要は大きく、「博多店運上帳」（註1）によれば博多網場町に京焼を専らに扱う小売店であった。明治時代になると複数の窯場が開かれ生産も拡大した。この時期の製品が春日市門田遺跡の遺物であろう（考古資料5）。

また、大町遺跡表土出土の土師器に見られるように、博多瓦町でおこなわれていた素焼物の生産も取り込んでいた。

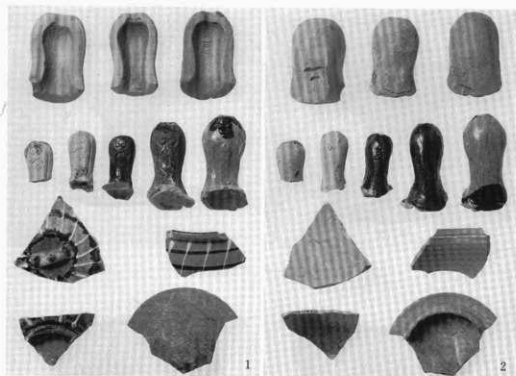
このことは都市消費のための窯業生産を都市の中で賄うという中、近世的な生産体制から脱する方向で野間焼の窯場が設定されたことを示唆している。（博多瓦町の瓦生産はすでに江戸中期頃から近郊の柏屋、今宿、麓原、宰府などに拡散しつつあった。註2）

大正から昭和初期にかけては駅売茶瓶が多く生産され（文献3. 5）、その製品が西花畑公民館に残されている（考古資料4及び第35図）。野間里山の鉄道茶瓶は門司鉄道管理局管内を一手に賄っていたといわれ、再度回収して焼き直して再出荷もしていた（岡本氏談）。なお、鉄道茶瓶は西新藤崎窯でも生産されていたようである（註3）。この時期の里山は40軒近くが陶器生産に従事していたという（岡本氏談）。昭和8（1933）年には福岡、博多に通じる幅員8mほどの道路が敷設され、製品搬出が飛躍的に楽になった。（註4）また、地元行政（福岡市）が胎土や釉薬の研究、新商品の開発をおこなう窯業研究所を造り、博多人形や野間、高取焼の保護育成に乗り出したが、世界大戦に向け企業統制、物資統制が進む中十分な成果を出さぬまま消滅してしまう（文献3）。

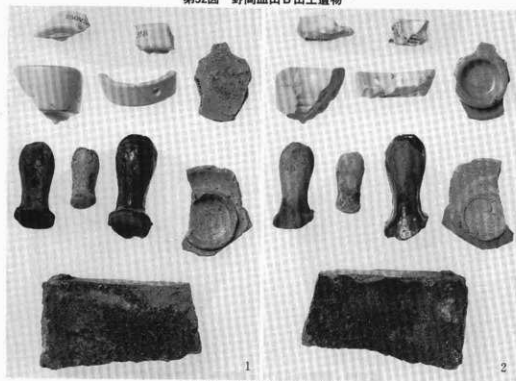
戦後の野間焼は野間焼を伝承する岡本光男氏の話によれば、復興に合わせて徐々に生産量を



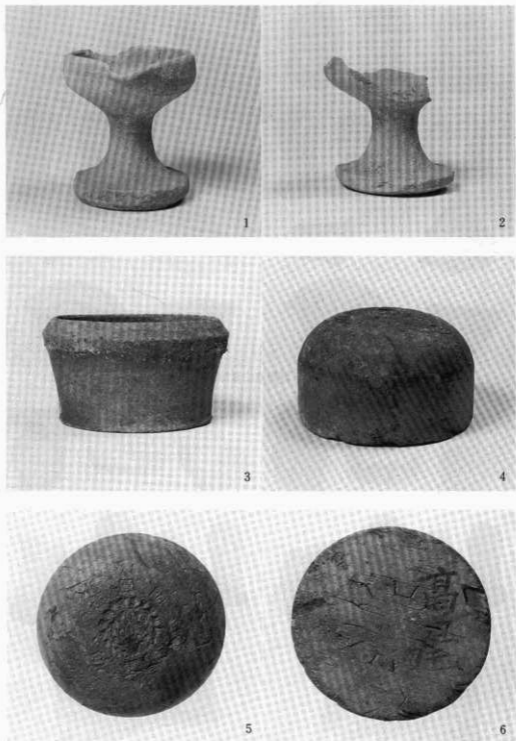
第31図 土師器皿造り
木製内型実測図(1/3)



第32図 野間皿山B出土遺物



第33図 野間皿山A出土遺物



第34図 野間山B出土遺物及び土師器内型

回復していったが、農地開放で職業を変える者も多く、七輪の消失、ガスコンロ、ポリ製品の普及という生活様式の変化に伴い、野間焼の主力商品である土瓶や行平、駅売土瓶はシェアを失っていった。その頃、昭和20年代後半頃から、分業化し生産を拡大しつつあった博多人形の工房（生地屋を主体とする）が新たに進出し、本業の陶器生産も民芸運動の復興によって生活雑貨としての民陶が見直され、観光客が窯元を訪れるようになったが、生活様式の欧米化は更に進み、周辺も公共道路の整備に伴い徐々に宅地化が進行し原土採取もままならぬ状況にまで追い込まれ（現在は筑豊田川の土を使用）、沢田（陶器、磁器＝戦前に高圧電気用碍子生産、素焼）、小林、安永、木下（以上陶器）、高尾（素焼）家などに5、6箇所あった登り窯、空吹き窯も取り壊され、現在は岡本氏1軒になったという。

現在、岡本氏の工房には土瓶を形成するためのロクロと石膏の外・内型や土師器の木彫りの内型（第31図註5）などが残されているが、ほとんど使用していないという。

江戸時代後半の土器消費様式の変化によって成立した一手工業種が、その後の消費様式の変化に伴って商品を開発し、引き続いて生産を継続してゆくことは並大抵のことではない。野間焼の歴史のなかには磁器から京焼や素焼物、京焼土瓶から鉄道茶瓶、博多人形と、次世代の主力商品を産み、また、受け入れる土壌があった。今は後継者も無く、産業そのものがなくなりつつある。

（山村信榮）

註1 「博多店運上帳」（「九州経済史論集」1958年福岡商工会議所）

2 「筑前国統風土記付録」土産考、「長政公御入国より二百年家由緒記」参照。

3 「藤崎遺跡Ⅴ」1990福岡市教育委員会藤崎遺跡第14次調査包含層出土遺物P 69参照。

4 福岡市南区里山2丁目1に道路施工時の顕彰碑が残っている。

5 博多で和菓子のラクガンの型などを彫っていた職人が、土師皿の内型を造っていたという（岡本氏談）。



博多仲間町の下沢商店（明治初期）
野間の道路敷設にも出資している。



▲野間皿山A、B地点



▲岡本光山工房(D地点)



▲野間皿山C地点



▲上工房内



▲西花畑公民館収蔵資料(中央2つが鉄道茶瓶)



▲伊賀土瓶と石コウの「型」



▶▶澤田舜山墓碑



▶ロクロ台と「内型」「外型」



第35図 福岡市野間皿山関連写真

图 版
(plate)



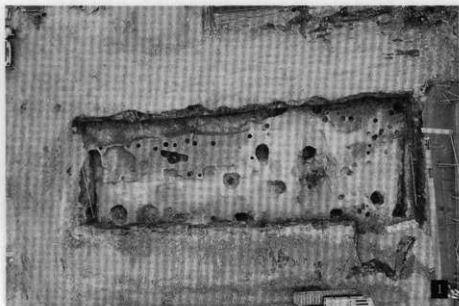
Pla 1



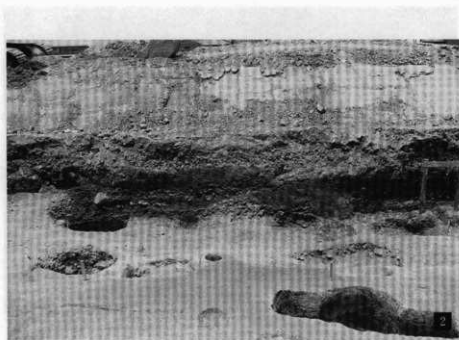
西鉄太宰府駅より南を望む



駅上空より太宰府天満宮を望む

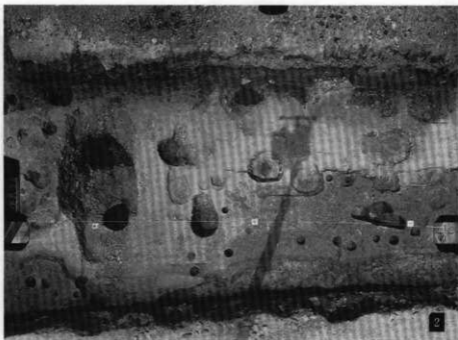


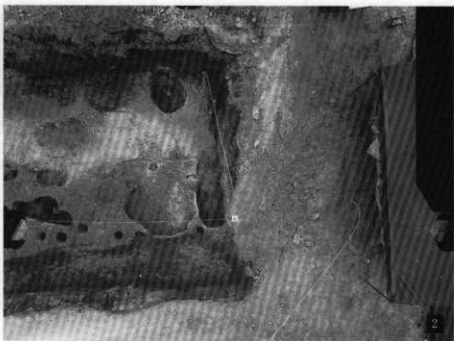
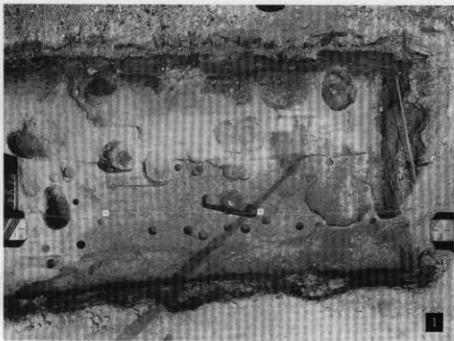
大町遺跡調査区全体図



大町遺跡調査区東側壁面土層図

Pl. 3





Pla 5



1



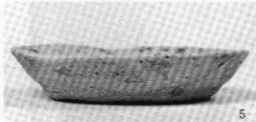
2



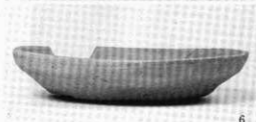
3



4



5



6

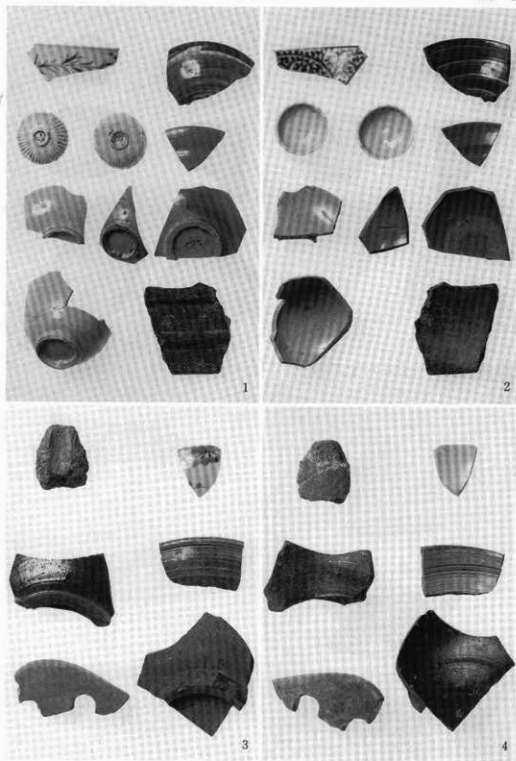


7

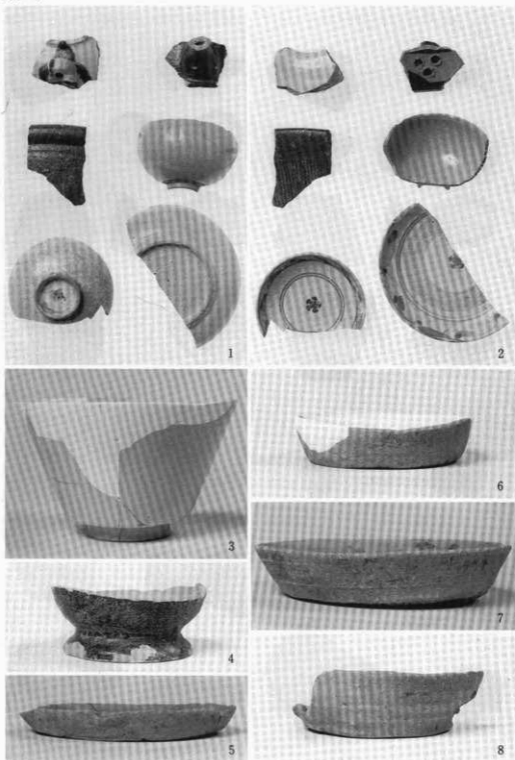


8

S K 005 · S K 022 · S K 034出土遺物



S K 008 · S K 032出土遺物



S D 003 · S X 010出土遺物



1



4



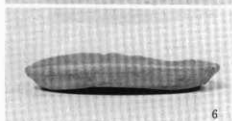
2



5



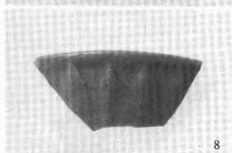
3



6



7



8



9



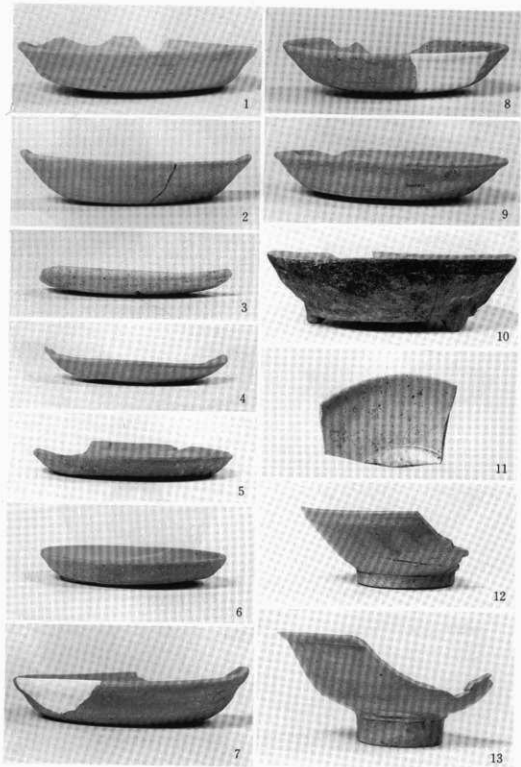
10



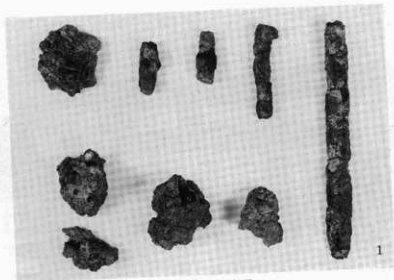
11

S X 010・表土出土遺物

Pl. 9



S X 020出土遺物



S X 010出土鉄製品



S X 020出土鉄製品



S X 020出土鉄製品

太宰府天滿宮鍔華表鑄立日記

『太宰府天満宮鍔華表鑄立日記』

はじめに

ここに掲載する「太宰府天満宮鍔華表鑄立日記」は、天明元（一七八一）年に現在の天満宮参道の入口部分（松屋の前）に建立された銅製の鳥居について、願主である常安九右衛門が発願から建立までの顛末をつづつたものである。

常安氏は肥前唐津の捕鯨を業とする網元であったという。

また、この鳥居は太平洋戦争の最中の昭和十八年八月十二日に太宰府天満宮から政府に金属供出され、姿を消した。大町の地名がこの鳥居に由来する「大鳥居町」であったとする説があり、まさに地域に根付いた建造物であった。

文書の所有は近藤典二氏（福岡市南区筑紫丘二丁目在）であり、読み下しは池畑祐樹氏（福岡県地方史研究所）、校正は太宰府市教育委員会がおこなった。御協力いただいた方々に心よりお礼申し上げます。

太宰府天満宮鍔華表鑄立日記

一、筑前太宰府天満宮は某若年の御令信厚の御宮にて、某三十四歳に相成候^{（巴）}の冬、佐嘉表銀取引^{（巴）}付大難出来^{（巴）}あまし候節、以御神慮大難吉事と相成、其後御神慮^{（巴）}増にて若年より不束の身分^{（巴）}御双方之奉蒙御恵を仮て被下、斯迄相成候儀、偏に御神慮と徹心取悉、夫より天満宮に何そ一際之御益に相成候寄附仕度存立、宿坊満盛院^{（巴）}相伺候処、御神前^{（巴）}御聞上られ被下候得、石の燈籠か鍔華表かと御聞に在之候故、両品之内^{（巴）}寄附致候様と有之候。鍔華表と申候て八大造成儀にて身分不相応にハ相心得候得、我念力を以何様成就為仕可申と三十八歳に相成候^{（巴）}の年分存立、大坂にも數度承^{（巴）}佐嘉筑前其外近国所々にて承合候へ、何分他所にて請負之鑄立不定に相聞へ候。依之某引受鑄立申より外無之趣に相決候故、夫今鍔華表鑄立の心配致之。

一、天明元年丑六月十六日、大坂嶋之内連人町池田屋七右衛門と申仁、某鍔華表鑄立之趣及承御世話申度旨にて新藏と申者兩人罷下り候処、某佐嘉逗留中にて同十八日佐嘉旅宿へ兩人共、罷越右之趣申聞候。同廿六日致面談鍔華表鑄立の一件委く承知致候処、七右衛門申方甚尤に相聞へ、凡千兩位之用にて鑄立可相成應申聞候。

左候得^レ所々積り、前とハ過分下直にて鑄立成就相成候儀と相心得、良日合建立存立、天明元年丑七月八日合七右衛門新藏一所に佐嘉出立致太宰府^ニ趣、同九日濟盛院へ着仕、鑄垂表鑄立候^ニ付、可相成ハ宰府にて鑄立仕度濟盛院寺領其外所々致見分候へ、深^ク有之候。其上炭灰底にて鑄立不相成候儀相決、依之七月十日博多^ニ出浮鑄立場所之儀石見屋仁右衛門杯及相談、其外釜師五次兵衛兩三人、西川屋長兵衛方^ニ相見へ十一月八終日及相談候得、博多にて何分鑄立不相成趣、付同十二日七右衛門一所に致燭宿候。何れ当所^ニ鑄立申より外無之趣に相決候故、大坂合功者成鑄物師兩三人も相履罷下り候様、猶又鑄立^ニ付入用之品々鉛白味其外鑄立入用之諸道具不残買下し候儀委細申談、七月十八日右衛門新藏当所致出立候。

一、丑八月下旬合名古厩休右衛門大坂^ニ差為登、諸買入之品相求、猶又鑄物師棟梁眼流平兵衛と申仁、池田屋七右衛門合相頼、外^ニ安兵衛と申者相履、鉛白味古銅并万力か、亭鑄立道具雜入用之品不殘相求、御手船自在丸合池田屋七右衛門眼流平兵衛堀田安兵衛休右衛門一所に丑十一月四日致下着候へ、某佐嘉逗留中にて同六月右三人并休右衛門一所に佐嘉へ打越候故佐嘉表にて諸事申談、同十日佐嘉合四人共^ニ唐津へ差戻、某ハ佐嘉致逗留候て、鑄立場所見立候様^ニ申遣候處、西の浜初數ヶ所致見分候由之所一丈五尺

五寸堀申候て水出不申所ならで鑄立場所に不相成候故、木總町懸ヶ屋敷合外には場所有之間敷と申聞候^ニ付、佐嘉表合内分相願、猶又木わた町^ニ定役初町内^ニも申談、十一月廿三日願書番出、同廿八日木わた町^ニた、ら相立鑄立候ても不苦懸被仰付候。

一、木總町掛屋敷夫合音願等いたし、た、ら一振相立、廬一丈五尺五寸穴掘候^ニハ勢子板を以口一丈五尺底八尺深サ一丈五尺五寸掘立候處、不思儀哉湧水出不申一丈六尺と成候へ、敷敷水勢に相成候得^ニ五寸の事にて一向水氣無之、一丈六寸之柱鑄立相成候様穴成就致候。

一、柱鑄立候形拵、桶師本町仁兵衛其外大勢相掛形之下地十二月初合正月末迄桶師大工數百工相懸候て柱形之下地致出来候。夫合眼流平兵衛初佐嘉合^ニ谷口安左衛門同清左衛門当所釜屋庄兵衛猶又庄兵衛釜屋之番子不殘相懸ケ、二月廿日過迄に形拵千工余掛り候て致出来、夫合燒立、二月廿九日迄に出来致候^ニ付柱四本之内宅本二月晦日鑄立に相極る。

一、天明二年寅二月晦日朝五ツ時合た、ら相立候て鉛白味共^ニ地金萬三千三百斤七ツ比迄に漸吹仕廻に相成候。仍鑄釜之湯口明け戸樋合鑄形に入候得、餘り手間取候故か湯加減甚悪敷一斗程と見候。湯形入り候て跡ハ出不申候。其節某ハ勿論平兵衛も甚仰天其外數百人の見物行を流尾、無念の有様無申と候。無是悲^レ其日ハ其儀

にて相仕廻候。

一、翌三月朔日千工余入候。鑄形打崩堀上見候処、右の柱盤上より尺六寸程も出来致文字も明らかに鑄立致出来候得、文字之居り場所甚不宜。縦湯加減宜敷候て柱芯本無難に致出来候、後年迄之心障に相成候故能も鑄損し候者哉と存候へハ、是又御神慮と雖有奉存、却後にハ悦候。尤此節鑄損の不益安からず候へ、斯迄致懸り候儀此上ハ最早何ヶ年懸り候、是悲一度ハ成就致させ可申と弥差部リ心配いたし候。

一、た、ら一挺にてハ三千斤余の地金涌立不申候故、何れた、らハ式挺相立可然旨細屋与次兵衛同所棟梁藤四郎も申聞候に依て、俄にた、ら一挺相増細屋与次兵衛方掛ニリ、棟梁藤四郎其外番子中不残相諾形拵にも此節合相懸ケ候。尤釜屋庄兵衛并番子中是ハ平兵衛仕立候。最初之た、らに不残相掛置候。

一、両釜屋棟梁并番子中佐嘉谷清左衛門谷口安左衛門其外手人共。都合三拾七人眼渡平兵衛差因を以日々形拵致候処、三月廿八日迄に形拵致出来、夫合形焼立、同廿七日迄相濟、翌廿八日鑄立に相極候。

一、天明二年寅三月廿八日明六ツ前合た、ら式挺相立吹立候処、白味鉛共三千五百斤之地金四ツ半比迄に吹仕廻候。尤此節合ハ俊成坊川民部前日合之祈禱にてた、ら之場所ハ勿論所々注連張格別

清メ諸事念入候て、鍋釜之湯口一番た、ら平兵衛口切二番細屋棟梁藤四郎口切候て兩方一所。式ツの戸樋合鑄形に入候処、九ツ前に入仕廻候。今度ハ出来致候様相見候故、安堵の思ひをなし跡仕廻夜五ツ比迄に相濟候。翌廿九日内外の形崩し万力を以釣上ケ相改候処、無難に致出来、文字の居り所聊申分も無之、則左之通、柱芯本成就候。



一、其後も右人数にて形拵いたし候処、四月廿三日、形拵出来、此節ハ湯加減もしれ候故、地金餘と吹立餘り湯にて楔式ツ貫之雜巻ツ鑄立候筈にて同廿四日合形焼掛り廿八日の鑄立に相極候。

一、天明二年寅四月廿八日明七ツ比合式挺のた、ら相立吹掛り候処、五ツ半過、白味鉛共三千八百斤の地金吹仕廻候故、平兵衛藤四郎鍋釜之湯口を切戸樋合鑄形入候処、別、火勢緩敷候へ、無難に柱形に入仕廻、其後楔式ツ貫の雜巻、鑄形に入濟候て日暮此迄に跡仕廻相濟候。翌廿四日内外の形取崩し万力にて釣上ケ相改候処、別、直敷出来文字も能居り左之通り柱芯本出来并楔巻ツ貫之雜巻ツ是又能出来。





一、此度ハ上之柱鑄立候。付内形盤上共ニ下地替り候故餘程手間入候得
 右人数にて形得いたし候処、五月廿六日迄ニ形致出来、夫合焼
 立、同廿八日鑄立に相極候。

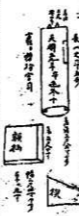
一、天明二年寅五月廿八日明ケ七ツ時合た、ら武挺相立鉛白味迄ニ三
 千八百斤之地金四ツ時前に吹仕舞、平兵衛藤四郎鍋釜之湯口を切
 式挺之戸種合鑄形に入候処、無難に入済候。夫合額柄卷ツ撰老ツ
 餘り湯にて鑄形に入候て暮比迄に跡仕舞相済候。翌廿九日内外之
 形取崩し万力にて釣上ケ改候処、無難ニ左之通柱出来、尤額柄ハ
 鑄撰撰老ツ致出来候。



一、此後ハ上之柱老本鑄立候得。柱之分四本成就相成候故、最早大願
 成就と某も落付候故、横梁平兵衛初諸職人番子并家来共も夏物
 并褒美等惣人数ニ差違候て最早成就に近寄候間、随分致出情與候
 様ニ申候処、何れも致出情候故六月十八日迄ニ鑄形致出来、夫合焼
 立、廿二日鑄立に相極候。

一、天明二年寅六月廿二日昼九ツ時合た、ら武挺相立吹掛候処、鉛白

味共ニ三千八百斤之地金八ツ時吹仕廻相成、鍋釜之両湯口を明
 例之通ニ挺之戸種合鑄形に入候処、無難に出来候様相見へ、猶又
 餘り湯にて額柄卷ツ撰老ツ鑄立候。何れも無難に出来相見、五
 ツ半比迄に跡仕廻相済候。翌廿三日内外之形崩し万力にて釣上相
 改候処、聊申所もなく立派に致出来候。是にて四本之柱鑄立成就
 に相成安堵るたし候。此度之鑄立之柱之通。



一、柱ハ四本共に吹仕廻今度ハ貫鑄立申答ニて、貫長サ式丈六尺七寸
 貫鼻五尺にて柱の内にて縦候て無難しと見へ候様に、此度之貫長
 サ一丈八尺八寸程にて是迄の穴埋候て横式間長サ四間程深サ八尺
 に掘り替勢子板にて土せき留メ穴も手入多ク其上貫形別手入故、
 九月朔日迄七十日目に漸貫形出来いたし、同二日合焼立、九月五
 日之鑄立に相極。

一、天明二年寅九月五日相成候処、北風強く大風同前にて何分た、
 ら相立かたたく、然れ一日も延候。形にしめり入候故、又候形焼
 直し不申候。ハ不叶候故、苦心違ひいたし大風なからも無提た、
 ら相立候様に致一決隣家の屋根にハ水手種或ハねこたを懸け、廿
 人程も家根に上げ置候て火の子を防ぎ候様に手配いたし、九ツ

此より吹懸り候処既に家根裏に三度程燃付候得^事不思儀哉、大風も火外もれず消候。四千貳百斤之地金八ツ半比吹仕廻、此度ハ長き物故式挺にてハ湯廻り悪敷、式挺相増四挺之戸櫃にて四ヶ所分貫形に入候処、無難に入済致安心跡仕廻夜四ツ過迄に相済候。翌六日内外之形取崩し相改候処、是又無難に別見事に致出来候。貫形左之通。



一、柱四本額柄榎三ツ貫鼻も巻ツ出来候故、残之品貫鼻巻ツ榎巻ツ也。此一品形拵も致出来、廿五日迄焼立相済、九月廿六日鑄立相極。
 一、天明二年寅九月廿六日貫鼻巻ツ榎巻ツた、ら巻挺相立鑄立候。翌廿七日相改候処何もよく出来、左之通。



一、華表も追々出来いたし候へハ最はや笠木鳩木とに相成候得、笠木鳩木ハ別大造成鑄立にて形拵餘程手を込、急にハ出来不致候故、最はや年内ハ相止め申筈に相決候。尤此序に夷彦山へ鑄燈籠一対鑄立候て寄附いたし候筈に存立候。但燈籠高サ一丈六尺五寸、

石之地輪高サ巻尺にて惣高一丈七尺五寸也。別紙繪図あり。是より燈籠之形拵に懸り候。尤眼流平兵衛ハ燈籠之形拵差圖にて笠木・島木之形下地拵にかゝり居。
 一、十月廿六日右燈籠之笠同笠受之式ツ鑄立候。
 一、同晦日笠巻ツ笠受巻ツ鑄立候処、笠ハ鑄損し笠受巻ツ出来いたし候。

一、十一月九日笠巻ツ鑄立候。
 一、十一月十日火袋巻ツぎほし巻ツ鑄立候。
 一、同十七日受蓮花巻ツ鑄立候。
 一、同十九日伏七蓮花一ツ伏七弁式ツ花式ツ鑄立候。
 一、十二月三日火袋吹候処、別見事出来。
 一、同十七日受蓮花巻ツ扉式ツ鑄立候。
 一、同廿五行燈受鑄候処、至見事出来。最早年内無餘日候故、年内ハ形拵と、た、ら小吹共相止め候。
 一、天明三年卯正月五日より細工相始。
 一、正月十七日行燈受鑄立候。
 一、同廿一日燈籠竿巻本鑄立候処、見事出来。尤此卒にハ奉奇蓮燈籠巻対^{寛政出陣}願主常安九右衛門保護
 一、同廿七日竿巻本鑄立候。此卒之文字
 天明二年十二月吉日^{寛政出陣} 惣殿坊^{寺社}

一、二月四日地盤鑄立候。

一、同九月右同斷。

右之通にて燈籠ハ皆済吹仕廻。相成大慶致し候。是ハ笠木嶋木鑄立候筈にて右形拵に不殘懸り候処、二月十三日迄形拵出
來致候故、十四日ハ燒立十七日鑄立に相極候。

一、天明三年卯二月十七日登九ツ時分、ら武挺相立吹立候処、七ツ前に鉛白味迄にハ四千式百斤之地金吹仕廻候故、鍋釜之湯口を切、平兵衛藤四郎笠木嶋木の鑄形に四挺之戸鑄にて四ヶ所入候処、地金不殘入済候もせきに満不申、甚以心遣ひ致候得、其假にて其夜四ツ時迄跡仕廻致し候。翌十八日内外之形崩し改候処、笠木嶋木厚五分之鑄形口出候て式寸之厚サに相成、笠木嶋木漸半分餘出來致居候て鑄損し残念此事候。併幾度にも鑄直し可申趣跟流平兵衛に申聞候処、笠木嶋木ハ別大造成物にて候得、鑄立ハ出來致間敷候故通延板に鑄立候取合可申由申候。然、笠木嶋木と合せ物に致候儀口惜く年数相懸り候、迎之儀何卒鑄立に可致旨様々評儀致候へ、何分鑄立不相成趣申候故、無是悲延板にて笠木嶋木之形りに二月十九日合廿三日迄十四五度鑄立申候得、出來致不申。平兵衛も様々致工夫候て鑄形を仕替或ハ五分之厚サ八分にも致見候得、出來致不申故、最早笠木嶋木とてハ鑄立之仕法無之由申候。依無是悲、笠木嶋木ハ下地木拵銅延板包申筈相決

候。

一、笠木嶋木之形拵ハ船大工可被置連八百慶半助所居候船大工教人相願、笠木嶋木之底ハ桶板厚サ三寸、監に土白石三挺切入候て重りに致、脇上柄何レも管寸五歩之杉板にて鉛釘ノ惣林上下脇共、黒塗ちやん懸、ニノ三月廿五日迄に致出來候。

一、上に包申候、銅延板下り合無之候故、俄に大坂嘉右衛門安兵衛兩人二月廿五日ハ調に登せ申候処、三月廿五日相調下り申候。廿六日ハ大工新吉友左衛門文六其外大勢包拵り申候故、四月朔日迄延板包出來致候。右之通、華表成就相成候故木綿町掛々慶敷組立候筈相極、四月朔日ハ建掛り同三日迄、笠木嶋木上ケ仕舞候処、至、恰好よろしく相建安心いたし候。并英彦山燈籠式本、是又一所に北側に建候。猶又天満宮御神前踏大香煙を一つ寄進仕候筈。出來致居候を華表下、飾り置華表の四方ハ注連を張り諸人見物趣支不申候様に致置候。同五日ハ老若男女貴賤之見物人近在ハ勿論遠郷嶋合、数千人之群集無限其節之散淺不殘太宰府上ケ候。一、右華表組建置候間ハ見物ハ不尺候へ、八月御祭礼前、宍府正建濟夫ハ右華表物數八箇荷拵に致か、り候。柱之分ハ下地七嶋上包蓋相濟候得、實笠木嶋木ハ右之通下包致其上を拵拵にて荷拵其手込候得、晝夜多人數相懸り候故、英彦山燈籠荷拵迄四月廿九日相

濟候。

一、右華表人足ハ步行持不相成候故、眼流平兵衛工夫を以京都御車
風に大車四抵將候。

一、宰府ハ華表建候。入用之諸道具不残此元ハ持越候。付ハ土台石長
柱車勢子板其外材木等迄不残西之浜ハ船積いたし候。付右之車四
ツハ廿七日ハ廿九日迄三日之間余斗之諸道具皆以西之浜ハ出し候。
都合能船積いたし候。

一、天明三年卯五月晦日華表機に相極候。依之惣町合も加勢差出可申
由ハ付断も申かたく受申候。扱又当町合ハ惣出ハ最初柱式本二車
ハ乗貫鼻式本額柄櫓四ツ英彦山燈籠一对共二車ハ乗せ都合四車數
百人懸りて引立申候。尤俊成坊戸川民部先立ハ前後左右ハ当町合
才領人數多付添、四ツの車ハ四神の旗を立、大旗四本にハ太宰
府天満宮寄附之華表と相記木綿町より西之浜迄八人之者先頭ハ引
出候林殊勝也。其日の見物大群集にて賑い申候。二度目にハ柱式
本笠木式本同様にて引立、弥増之群集也。西の浜にて江川町之子
供車に敷れ候得ハ不思儀故、怪我もなく西ノ浜船場迄四ツの車同
度返りにて燈籠迄も暮比迄に引濟候。

一、惣町加勢人賄所ハ西の浜に縦屋建酒食共ハ差支不申候様に用意い
たし候処、在々之見物數千人赤飯ハ御供、申酒ハ御造酒と申立
頂載致度申候て取懸ケ候故中々賄も行届不申候得、俄に可致様

も無之尤何程用意申候も際限ハ無之様子に相見へ候。其中ハ
給辭候者も相見候。

一、卯五月朔日ハ華表八箇并燈籠も船積可致候処、北風強く船積不
相成候故西之浜縦屋番付置申候。五月五日漸和波に相成候故、
懸り船迄之所材木にて筏を組、ろくろにて巻込候様に船積之用意
いたし候。尤積船ハ筑前石積天満五艘廣岐屋伝右衛門船細だん平
式艘水嶋半次郎船一艘ノ八艘ハ華表并燈籠其外華表建道具材木土
台石兵糧米世帯道具迄八艘に七日迄積仕廻候処、翌八日順風。相
成明ケ方八艘共に大嶋出帆いたし候処、至之順風にて博多迄過
入津。其節ハ博多之浜ハ數艘漕船迎に出甚賑々敷無難に博多着
致候。其事ハ八日昼立ハ深江泊り、九日昼博多着致、夫ハ華表
燈籠共ハ博多洲崎浜へ揚、夜分ハ燈籠灯シ候。扱又石見屋隔屋敷
ハ英彦山寄附之燈籠組建置候処、博多福岡ハ華表并燈籠之見物人
晝夜無限候。

一、華表建諸道具并世帯入用之品々宰府へ遣候物過分之儀、博多ハ宰
府迄五月十一日ハ一日一車二車宛手人にて引候得、過分之諸道
具極暑之御、急にはかゆき不申、六月廿一日迄凡四十日程か、り
候。宰府肥前屋惣助所迄運ひ濟候。尤肥前屋惣助所手狭に候て多
人數逗留不相成候故、早春ハ裏座敷普請致し宿相極。

一、卯六月廿六日華表引に相定候処、博多福岡并近在合も華表引。罷

出度由_レ候。加勢受候得_レ却_レ心遣ひも多く候故、願_ハ請負_ニ引せ度候へ。天満宮へ之志断も申かたく無_ニ無_ニ加勢受候答_ニ相極_メ候。

一、天明三年卯六月廿六日博多洲崎_ニ宰府へ華表引候節、四ツの車へ柱四本額柄乗せ四方_ニハ四神の旗を立、并_ニ太宰府天満宮寄附之大旗立注連張り四ツの車博多洲崎より辻ノ堂口へ音頭にて引出候。林、賑々敷中_ニも甚殊勝也。博多福岡近在々之見物群集無_レ候。尤_ニ編町_ニハ石見屋間屋故別_ニ加勢人_ニ多く、別_ニ車巻_ニ振立_ニ貫鼻_ニ巻_ニツ乗_ニせ_ニ千疋_ニ額_ニ之飾_ニり_ニ物_ニ某_ニも_ニ樽_ニ大_ニ號_ニと_ニ之_ニ進_ニ物_ニ右_ニ車_ニ乗_ニせ_ニ、宰府迄はやしに致_ニ華表_ニ之_ニ車_ニ一_ニ所_ニに_ニ來_ニ候。其日_ニの_ニ群_ニ集_ニ前_ニ代_ニ未_ニ聞_ニと_ニ風_ニ聞_ニ致_ニ候。

一、雜掌限におみて昼食にハ赤飯申指煮染白片木盛_ニノ酒_ニハ梅_ニの_ニ鐘_ニ明け_ニ茶_ニ碗_ニ柄_ニ杓_ニ添_ニ置_ニ凡_ニ五百_ニ人_ニ前_ニ用_ニ意_ニ致_ニ申_ニ候_ニ處_ニ、追々_ニ宰府_ニを_ニ申_ニ來_ニ候_ニも_ニ車_ニ引_ニ五百_ニ人_ニ位_ニ之_ニ儀_ニハ_ニ無_ニ之_ニ由_ニ申_ニ候_ニ付_ニ、俄_ニ不_ニ足_ニ之_ニ分_ニ相_ニ増_ニ候_ニ得_ニ不_ニ任_ニ心_ニ底_ニ所_ニ全_ニ行_ニ届_ニ可_ニ申_ニ候_ニ無_ニ之_ニ候。宰府_ニハ_ニ猶_ニ以_ニ人_ニ數_ニ相_ニ増_ニ候_ニ付_ニ肥_ニ前_ニ屋_ニハ_ニ勿_ニ論_ニ大_ニ町_ニ手_ニ広_ニき_ニ所_ニ數_ニケ_ニ所_ニ貸_ニり_ニ候_ニ節_ニ漸_ニに_ニ相_ニ仕_ニ廻_ニ、大_ニ渡_ニ雜_ニ有_ニ之_ニ候。柱_ニ四_ニ本_ニ額_ニ柄_ニ貫_ニ鼻_ニ模_ニ乘_ニせ_ニ候_ニ四_ニ車_ニ共_ニに_ニ無_ニ藩_ニ宰府_ニへ_ニ當_ニ前_ニに_ニ引_ニ付_ニ申_ニ候。

一、華表引残り候分七月三日と相定四ツの車に笠木嶋木貫其外燈籠之類乗せ前度之通博多洲崎_ニ辻ノ堂口へ引出候處、此度_ニハ_ニ別_ニ評_ニ判_ニ太_ニく_ニ相_ニ成_ニ博_ニ多_ニ市_ニ中_ニ之_ニ子_ニ供_ニ數_ニ百_ニ人_ニ立_ニ派_ニ、衣_ニ裝_ニを_ニ拵_ニ車_ニ之_ニ綱_ニに_ニ纏_ニ引_ニ付_ニ候_ニ、其_ニ則_ニ砲_ニ雷_ニ流_ニ行_ニ候_ニ費_ニ中_ニ、砲_ニ雷_ニ甚_ニき_ニ様_ニに_ニ宰府_ニ迄_ニ幼_ニ年_ニ之_ニ子_ニ供_ニも_ニ引

來_ニ殊_ニ勝_ニ成_ニ事_ニ無_ニ限_ニ候。扱_ニ又_ニ今_ニ度_ニ之_ニ加_ニ勢_ニ大_ニ人_ニ數_ニと_ニ相_ニ聞_ニ候_ニ候_ニへ、千_ニ人_ニ程_ニも_ニ届_ニ候_ニ様_ニに_ニ雜_ニ掌_ニ限_ニ宰府_ニ兩_ニ所_ニ正_ニ赤_ニ飯_ニ申_ニ指_ニに_ニし_ニめ_ニ白_ニ片_ニ木_ニ盛_ニ酒_ニハ_ニ樽_ニの_ニ鏡_ニ明_ニけ_ニ茶_ニ碗_ニ柄_ニ杓_ニ相_ニ添_ニ最_ニ初_ニ之_ニ通_ニ用_ニ意_ニ致_ニし_ニ置_ニ候_ニ處_ニ、四_ニ車_ニに_ニ取_ニ付_ニ居_ニ候_ニ人_ニ、中々_ニ千_ニ人_ニ位_ニ之_ニ儀_ニハ_ニ無_ニ之_ニ懸_ニ追_ニ々_ニ申_ニ來_ニ候_ニ得_ニ、雜_ニ掌_ニ限_ニ迎_ニも_ニ可_ニ致_ニ様_ニも_ニ無_ニ之_ニ、宰府_ニハ_ニ肥_ニ前_ニ屋_ニ惣_ニ助_ニ方_ニハ_ニ勿_ニ論_ニ其_ニ外_ニ大_ニ町_ニ廣_ニき_ニ所_ニ九_ニケ_ニ所_ニ借_ニり_ニ候_ニて_ニ致_ニ賄_ニ候_ニへ、半_ニ分_ニ程_ニハ_ニ休_ニ所_ニも_ニ無_ニ之_ニ賄_ニ方_ニ行_ニ届_ニ可_ニ申_ニ候_ニも_ニ無_ニ之_ニ候_ニ付_ニ何_ニ方_ニ成_ニ、銘_ニ々_ニ凌_ニ亂_ニ、及_ニ不_ニ申_ニ候_ニ支_ニ度_ニ有_ニ之_ニ候_ニハ、後_ニ日_ニ手_ニ前_ニ分_ニ弘_ニ方_ニハ_ニ可_ニ致_ニ旨_ニ申_ニ談_ニ候_ニて_ニ漸_ニ夜_ニ五_ニツ_ニ比_ニ迄_ニに_ニ相_ニ濟_ニ申_ニ候。寔_ニに_ニ大_ニ群_ニ集_ニ故_ニ前_ニ代_ニ未_ニ聞_ニ之_ニ心_ニ違_ニひ_ニも_ニ致_ニ候_ニ得_ニ、聊_ニ何_ニ障_ニなく_ニ兩_ニ度_ニ之_ニ華_ニ表_ニ引_ニ雜_ニ難_ニに_ニ相_ニ濟_ニ候。

一、華表建候沓石ハ宰府町端_レより二ツ共に切出候。尤引出候節、夫しゆらに乗せ手人之外ハ宰府大町より七十人程宛兩日加勢有之候故、二ツ共に兩日引出申候。尤賄ハ肥前屋惣助所にて兩日共に致候。

一、沓石に相懸り候石工宰府吉部次博多仁右衛門当所よりハ文七清助殿之輔徳兵衛其外ハ博多石工七人相履都合拾式人相懸ケ、卯五月_ニの_ニ七_ニ月_ニ十_ニ日_ニ迄_ニに_ニ沓_ニ石_ニ切_ニ立_ニ致_ニ出_ニ來_ニ候。

一、沓石切立之間ハ大町若松屋ヘ石工中相分ケ候。地突_ニ華_ニ表_ニ建_ニ濟_ニ候_ニ迄_ニハ_ニ若_ニ松_ニ屋_ニへ_ニ不_ニ残_ニ毎_ニ日_ニ相_ニ詰_ニ取_ニと_ニ候。

一、卯七月十一日_ニの_ニ地_ニ突_ニ致_ニ懸_ニり_ニ申_ニ候_ニ處_ニ、近_ニ辺_ニへ_ニ差_ニ支_ニ有_ニ之_ニ暫_ニ相_ニ止_ニメ_ニ候。十七日_ニの_ニ又_ニ々_ニ相_ニ始_ニ地_ニ突_ニ致_ニ候。手_ニ人_ニ之_ニ外_ニハ_ニ毎_ニ日_ニ宰府_ニ分_ニ三_ニ四_ニ十_ニ冠_ニ之_ニ加

勢有之候故、七月廿三日迄に日數十二日にて地突出來候。尤華表
建候場所地之内水強く出候所にて水留り不輕候故、番石之脇に水
道拵候て地内に水流候様に致置候。地突も致出來番石二ツ共
に居り候。付、卯八月三日ハ華表建懸り同十二日迄に日數十日に
て建濟候。尤華表柱之内ハ貫下迄小石白土合註詰置末々迄驟狂ひ
不申様に念入建濟致成就候。依八月十六日棟上ケ之規式相懸候筈
に相極メ候。尤同日大鳥居延寿王院満盛院其外十ヶ寺程御通り初
在之由申來候。

一、華表棟上ケ之節宰府御社中ハ勿論、町之近在車引道筋宿々其外世
話に相成候所へ不殘配候餅并華表下に餅餅之分、幸屋註兩日搦候。
一、八月十六日華表棟上ケ之規式通り初、相極り候儀専ら風聞在之候
故、兼々御重恩之上、大造成御樽肴拝領被仰付候。其外宰府御社
中ハ御一ヶ所も無殘御樽昆布屑子并佐嘉懸意中馬場森水堤鎌山森
田其外多人數被相越樽肴猶又大嶋台銘々之運物註博多ハ石見
屋初其外問屋中數ヶ所之樽肴嶋台等來候。當町ハ惣町無殘宰府
ハ町々近座或ハ華表引候遺筋休所之宿々も樽肴致到來候處、四
斗樽十七挺一斗樽ハ式升樽迄百貳拾七大嶋台七ツ白木折五十六罎
子昆布載候台も數多之儀。置所無之不殘華表之脇に積立置候。
一、天明三年卯八月十六日朝六ツ時合棟上ケ之御規式御動始り候處四
ツ比相濟候。夫ハ大鳥居小鳥居満盛院其外十ヶ寺程御通初相濟候

て某事ハ三間後れ通り候様註也。忝共ハ夫ハ式間後レ弟共ハ又
老間後れ夫ハ佐嘉筑前唐津伊万里呼子所々合其節相越居候懸意の
人々并惣職人華表に相掛り候人數不殘參詣致候様註也。右之通註
御通初濟候。御社註致參詣候處稱成寄進註と申儀註。某ハ満盛院合
造酒被下其外註ハ御番僧合參詣之人數不殘造酒被下頂戴相濟候後
音楽始り、御勤凡一時程之間御神前註奉拝罷在候内、某若年之昔
を相考候へハ不如意之身分。右之燈籠一本之寄進も相成不申候。
某不思議註も斯迄成立候て初癸池田屋七右衛門千兩位之入用註成
就相成候趣申候。付所々積高とハ格別下直註成就いたし候趣註付、
何卒我念力を以て成就致致可申と其日合寄附存立申候處、七右衛
門申候。其倍余入用之高、相成候得、華表入用何方註も不納不致成
就いたし候義全某か寄進にあらず、天満尊神躰之華表御為好被為
遊候て我を御取立にて斯成就致候也。我ハ則支配に相立候哉、存
付候得、雖有サ弥増にて前後を忘落涙無限候。夫合御勤相濟候て
御神前引取華表之元註規式飾り在之候。其下三間、八間之飯屋建
碁打有之候所にて拝領之御樽肴并所々合之樽肴嶋台註以、佐嘉筑
前所々懸意之仁註棟上之規式相越候。人數宰府も世話相成候所、
ハ不殘惣職人共、數百人華表成就之祝儀相懸候。尤佐嘉馬場長兵
衛方合華表之左右、七尺、九尺之大燈籠一對寄進有之。其外宰府
町々筑前懸意中合寄附之燈籠十五日合十六日夜迄夥數灯し候て夜

半過比迄無滯相濟候。翌十七日跡仕廻。懸り卯八月廿七日諸職人迄も不残宰府致出立武藏湯町迄相越。夫々英彦山寄附之鐙燈籠荷作り。懸り二日市々英彦山迄人足。差送り、卯九月十日迄に燈籠も建仕廻候。九月十六日百日余り之日數にて速越候。惣人数一所。目出度備宿致し候。

一、右華表鑄立候。懸歴敷其後致普請夫土藏を解、其跡天満宮御社建立致聖持院勸請。華表天満宮と号す。天明七年末八月廿五日御遷宮致候処、市守之飾りもの燈籠前代未聞大造成儀。參詣無限候。此外華表一件ハ委く別帳に有之候得、三ヶ年之日記あらまし記置候也。

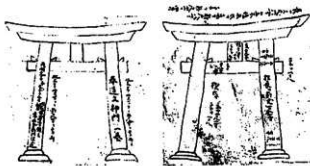




圖 1



圖 2



圖 3



圖 4



圖 5



圖 6



圖 7



圖 8



圖 9

第35圖 「太宰府天滿宮踏華表竝立日記」挿圖



第36図 ありし日の大町の銅鳥居



第37図 「日記」冒頭部分

大町遺跡

太宰府市の文化財第18集

発行 財団法人 古都大宰府を守る会
太宰府市大字観世音寺544-3
(大宰府展示館内)

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
福岡市中央区天神5丁目4番16号

太宰府教育委員会の了解を得て財団法人 古都大宰府を守る会が増刷、頒布するものである